

# 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

平林 朋之

Survey on Teacher Attitudes in public combined junior and senior high schools

HIRABAYASHI Tomoyuki

This study explored the attitudes of teachers working at three public combined junior and senior high schools. (Chap.2) In the survey on current perceptions of the schools to which they belong, there were items for which the answers tended to be the same, and items with high independence by school. The problem for all schools was that it was difficult to see the "Decision process of educational content" of different school type. Factor analysis revealed 3 factors: "Transboundary culture" "Curriculum" and "Information sharing". (Chap.3) According to the survey on cooperation, around half of the teachers were highly motivated to improve their schools crossing the border between the junior and senior high schools. The analysis of the correlation between each item suggests that frequent "opportunities of observing classes" and "opportunities to interact with the students at the attached schools" may be a clue to developing ideal teachers in combined junior and senior high schools. (Chap.4) In the items of the survey on attitudes toward instruction, junior high school teachers and high school teachers had different ideas in the following education philosophy respectively; "difference in academic ability", "education free from pressure" and "life guidance". (Chap.5) There were also differences in the study of learning from different school types of teachers, suggesting that the knowledge, skills, and attitudes accumulated by working in each school type were different. It became clear that they had a positive effect on each other. (Chap.7) However, in personnel exchange, there are various conflicts between teachers from different school type. (Chap.6) In the item which investigated desirable way of public combined junior and senior high schools, the teachers' own thoughts were different from the present state in the belonging school.

## 目次

- |                             |                           |
|-----------------------------|---------------------------|
| 1. 調査の概要                    | 2-4. 改善提案の発信者             |
| 1-1. 課題設定                   | 3. 協働に関わる中高教員の意識          |
| 1-2. 先行研究とその課題              | 3-1 中高一貫校での戸惑い            |
| 1-3. 方法と対象                  | 3-2 併設学校への提案              |
| 1-4. 質問項目について               | 3-3 異校種との界面               |
| 2. 所属する中高一貫校の現状             | 4. 指導に関わる中高教員の意識          |
| 2-1. 所属校の様子                 | 5. 異校種教員からの学び             |
| 2-2. 項目の因子による分類             | 5-1. 回答数                  |
| 2-3. 中高一貫校として大切にしていると思われるもの | 5-2. 内容                   |
|                             | 6. 望ましい中高一貫校の在り方          |
|                             | 6-1. 中高一貫教育推進のための望ましい学校経営 |
|                             | 6-2. 中高一貫教育で大切にしたいこと      |

- 6-3. 効果的な中高一貫校の取り組み  
 7. 人事交流の経験  
 8. 本研究のまとめ  
 参考資料 質問紙調査の集計結果(全体)

## 1. 調査の概要

### 1-1. 課題設定

本研究は、平成11年4月より導入された公立中高一貫校のうち、併設型中高一貫校に勤務する教員の意識を調査し、その結果を分析するものである。

中高一貫教育の実施形態の1つである併設型中高一貫校では、2つの校種の学校が同一敷地内に併置されている。そのため、同じ敷地内で中学生と高校生が学習するだけでなく、中学校の教職員と高等学校の教職員とが日常的に交流を持つことになる。教職員組織が一体化されている中等教育学校と異なるのは、教員の所属が併設高等学校と併設中学校とに分かれていることである。志水(2002)によれば、学校文化は「近代の制度としての学校文化」「国・時代・段階別の学校文化」「個別学校の文化」の3層構造をなすという。併設型中高一貫校ではこのうちの中間階層である「段階別の文化」、つまり、中学校の学校文化と、高校の学校文化という、それぞれ特有の文化を持つ2つの集団がその独自性を一定程度保ちながら、協働して中高一貫教育にあたっていると考えられる。

本研究は、次節で紹介する先行研究の限界を踏まえ、「併設型中高一貫校に勤務する教員は、所属校の現状と、中高一貫教育の理想をどのように考えているのか。そこに中高教員の違いはあるのか。教職員の協働はどの程度進んでいるのか。中高一貫校勤務の教員において、中高教員の『意識差』や、『意識差』を源泉とした『成長』につながる学びは、どのようにみられるものなのか」を明らかにすることを課題とし、これまで十分になされていなかった、中高一貫校教員の意識に関する量的調査を行った。また調査結果から、よりよい中高一貫教育を促進するための学校経営・教育行政の在り方を考察した。

### 1-2. 先行研究とその課題

中高一貫教育の現状と課題に関する量的研究とし

ては、国立教育政策研究所(2016)の調査と、油布・六島(2006)の調査がある。

国立教育政策研究所(2016)の行った公立中高一貫校の学校長に対する調査によれば、教職員に関わって対応すべき課題は

表1のように分布している。

表1 教職員課題 国立教育政策研究所(2016)より筆者作成

課題項目名	全体	中等教育学校	併設型
教職員負担増	12.5%	10.3%	13.3%
教員人事	13.5%	13.8%	13.3%
教員意識差	23.1%	6.9%	29.3%

「教員意識差」を課題とする学校は併設型一貫校の29.3%を占め、この割合は中等教育学校の6.9%と比較して顕著に多い。また同調査によれば、その差は、開校から時間の経った学校であるほど大きくなる傾向にある(開校13年以上でこの課題を抱える学校は、併設型一貫校の38.9%を占めるが、中等学校には存在しない)。他方で、成果として「教職員成長」を認識している学校は併設型の33.8%、中等教育学校の16.7%を占めている。

表2 公立中高一貫校で認識された成果(課題割合) 国立教育政策研究所(2016)より筆者作成

課題項目名	全体	中等教育学校	併設型
教職員成長	28.8%	16.7%	33.8%

この結果について、国立教育政策研究所(2016)は「組織が違うことで生じてしまう学校間の意識のギャップを乗り越えることで、より教職員の成長につながりやすくなっていると考えられよう」(p.70)と述べている。

油布・六島(2006)は平成16年11月の時点で把握

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

できた全国の公立中高一貫教育校 295 校の全てを対象にアンケート調査を行い、184 校(うち併設型中高一貫校は 39 校)から回答を得ている。この研究では、中高一貫校の現状と課題について、第一に、中高一貫校は高校受験という重圧から子どもたちを解放したかに見えたが、受験の低年齢化を進めるその選抜試験、大学受験を強く意識したその教育課程ゆえに、受験の重圧から全面的に子どもを解放するわけではないと述べられている。そして第二には、中高一貫校では、生徒が「高校で勉強しない(中 3 で勉強しない)」(p.112)という課題が生じているが、受験という動機付け要因がなくなれば、「勉強をしない生徒も増加するのは自明である。学校生活の『ゆとり』がもたらした、弛緩した子どもたちの学校生活の指導と、学力の保証は教師にとってきわめて大きな課題となるに違いない」(同頁)として、受験という重圧の解消が望ましいかは検討されるべき課題だとしている。

中学校と高校との間で行われる人事交流や、中高一貫校での教師の成長を質的に研究したものとしては以下の 3 つの研究があげられる。

高田(2000)は、主として一般の公立中学校・公立高等学校同士の人事交流を扱った研究であり、ここでは人事交流を長期に亘って実施している県を対象に、人事交流によって得られた効果や発生した問題点が考察されている。各都道府県の中高一貫校の取り組みも調査されており、「中高の接続部分に対しての教職員の為すべきことや連携の姿にはほとんど違いが見いだせない」とし、「中高一貫校でなければ中高連携が深まらないとは限らない、と判断できる」(p.95)と述べられている。

田原(2017)は、一教員のライフストーリーの研究を通し、中高一貫校における教師の成長・発達プロセスとして、(1)「これまでの勤務校との差異の実感」から「生徒の発達に応じた関わり」、(2)「中高 6 年間を通しての生徒の変化の実感」から「生徒の歴史を踏まえた指導」(3)「生徒を見る視点の変容の実感」から「より丁寧な指導」へ、という 3 つのモデルを示す。

赤岩(2017)は中等教育学校に赴任した中学校教員と高校教員を対象に、前期・後期課程を教えるなかで、それぞれがどのような「違和感や戸惑い」を感じ、どのように教職アイデンティティを再構築しているの

かを分析し、学校間移行経験による教師の変容を記述しようとしている。赤岩(2017)は、量的な研究で、その存在が指摘されていた中高一貫教育での「戸惑いと違和感」について、質的研究によってその内実に向ったものであり、ここでは「戸惑いと違和感」が、中学教師について 9、高校教師について 7 のグループに分類、ラベリングされている(図 1)。

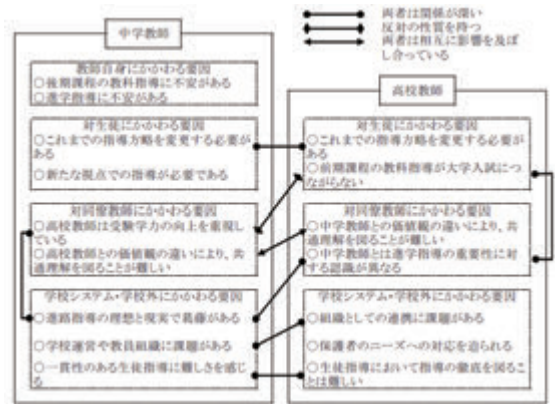


図 1 戸惑いと違和感 赤岩(2017)より筆者作成

中高一貫校における協働と経営に関する研究には次の 3 つがある。

小林(2013)は 3 年後に中高一貫校開設を控えた高校を調査し、高校教員自身が、(個々の教師の独自性が高い) パルカン主義に陥っていることを問題視していることを明らかにし、パルカン主義を乗り越え、教職員の同僚性を促進する新中高一貫校での研修について検討している。小林(2014)は、理念の共有とコアバリュー形成を図りながら、実際に中高合同の授業研究会を実施し、その事前・事後の分析を行っている。そして、中学校の授業研究会のシステムは高校教員にとって刺激的なものである一方で、中学校も過渡期にあるために両者の授業研究文化にはそれほど隔たりはなかったと述べる。また、中学校の教師が高校教師の傲慢な態度に憤慨し、高校の授業に足が向かないという状況からは、中学校教師にも(高校教員に対し障壁をつくるという意味での) パルカン主義がうかがわれると指摘している。

私立中高一貫校な主な対象とした石田(2011)は、中高一貫校におけるリーダーシップと同僚生について

考察した。英語科職員への聞き取り調査によって、(教員達は)「学校や英語科の目標を教員一人ひとりが共有して、納得した上で授業や指導にあたることで効果が上がると認識している」(p.433)ことが確認できたとする。また、「特に中高一貫校のような新しい教育組織においては、同僚性が新しい挑戦の基礎となる。インフォーマントである教員たちは、リーダーシップとマネジメントに関して同僚性モデルは形式モデルより優れていると感じている」(同頁)と述べる一方で、その「同僚性」は「教授的同僚性」であり、教授と切り離された「同僚性モデル」は日本の学校現場に馴染まないものだと主張している。

国立教育政策研究所(2016)、油布・六島(2006)が行った質問紙調査は学校を単位とするものであり、その回答者は学校長あるいは学校長の代理をなす立場の教職員(管理職等)であるため、一般の教員の意識を明らかにするものではない。高田(2000)の研究は、全国的に見ても多くの中高一貫校が準備段階にあった時期になされたこともあり、中高一貫教育のありようを詳細に分析するには至っていない。また、中高一貫校での人事交流と、一般公立中学校・高等学校間での人事交流との間に、教員が連携する様子の違いは無いというその結論には、学校組織の変化を見る視点が欠けている。田原(2017)はライフストーリーの研究であり、本研究のリサーチクエスションに答えるものではない。赤岩(2017)の研究は、今まで明らかにならなかった中高一貫校での「戸惑いと違和感」の内実を明らかにした点で極めて重要である。しかしながら、個人の成長に着目しているため、それがどのように組織としてのイノベーションにつながるのかは明らかにしておらず、またここでは1校の中等教育学校について、質的な分析がなされたのみなので、仮説としての「戸惑いと違和感」の内実について、調査対象地域や、異なる種類の中高一貫教育でも同じことがいえるのかを、質的・量的調査によって検証する必要がある。小林(2013)、小林(2014)は、高校教員文化・中学校教員文化の距離について示唆することの多い研究であるが、中高一貫校化を控えた学校の研究であり、実際に中高一貫校になってからの協働による教員の変化は捉えられておらず、また単一事例研究であることを考慮すると、授業研

究文化において高校と中学校はそれほど距離がないとする見解も慎重に扱わなければならない。石田(2011)の研究は、リーダーシップ論の観点から、中高一貫校経営においてはトップダウンのマネジメントを行うよりも同僚性を醸成することが有効であると指摘している点で興味深い。しかし、中高の教員の意識差は十分に検討されておらず、また教科指導に焦点を当てたものであるため、教育活動一般の実態と可能性をもっと幅広く検討する余地を残している。

### 1-3.方法と対象

本研究では3つの学校に勤務する教員に対して質問紙調査を行った。質問紙調査と並行して調査対象校のうち2校の14名の教員に対するインタビュー調査も行っており、本稿ではこれで得られたデータにも適宜言及する。質的調査だけでは調査対象者数が限られるが、質問紙調査を行うことで、中高一貫校の現状と、中高一貫校に勤務する教員の意識を広範に明らかにすることができる。また、複数の学校の教員を対象としたのは、教職員の意識が所属校によってどう異なるかを見ることで、教職員の意識と学校経営の在り方との関係を調べるからである。

質問項目の作成に当たっては、パイロットサーベイとして中高一貫校での勤務を経験した3名の教員のインタビューを実施し、その語りの内容をコーディング、カテゴリ化し、より多くの教員に調査が必要だと考えられる内容を抽出した。また、中高教員の「戸惑いと違和感」について赤岩(2017)、教員の協働について淵上(2004)、学校の組織文化について露口(2008)を参考に作成した質問項目もこれに加えた。

調査は2017年12月20日から2018年1月12日にかけて、Googleフォームを使いWeb上で行った。無記名式のアンケートフォームを用いた。

対象は、A県の公立併設型中高一貫校3校に所属する常勤の教諭・講師で、併設中学校26名、併設高等学校65名の計91名(回収率 中学校49.0%、高等学校53.3%)から回答を得ることができた。なお、3校の概要と14名のインタビューの属性は以下の通りである。



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

- B 高等学校・併設中学校  
併設中学校開校 15 年目
- C 高等学校・併設中学校  
併設中学校開校 15 年目
- D 高等学校・併設中学校  
併設中学校開校 16 年目

## B 校関係者

高校籍高校教諭(公立中学校・中高一貫校中等部  
経験あり)

中学籍中等部教諭(授業交流経験あり)

中学籍中等部教諭(授業交流経験あり)

中学籍中等部教諭(授業交流経験あり)

高校籍高校教諭(授業交流経験あり)

高校籍中等部教諭

中学籍中等部教頭

## C 校関係者

高校籍公立中学校教諭(C 校教諭経験あり)

中学籍中等部教諭(高校講師経験あり)

中学籍高校教諭

中学籍中等部教諭(中高一貫校高校教諭経験あり)

中学籍中等部教頭(中高一貫校中等部教諭経験あり)

高校籍高校教諭(中高一貫校中等部教諭経験あり)

高校籍高校教頭 (前 C 高教頭・公立中学校・中高一貫校高校教諭経験あり)

3 校とも併設中学校のことを「中等部」と呼称し、質問紙調査の質問項目でも「中等部」という名前を使ったので、本稿では併設高等学校を「高等学校」、併設中学校を「中等部」と呼ぶ。

## 1-4. 質問項目について

質問紙調査は全部で 24 の大問から成る(表 3 参照)。大問は大きく、①回答者は所属する中高一貫校の現状をどのように捉えているのかを問うもの、②回答者自身はどのような思いを持って教育活動を行っているのかを問うもの、③回答者自身が望ましいと思う中高一貫校はどのようなものかを問うものの 3 つ

に分かれる。補足的に、中高の人事交流の経験がある教員には人事交流中の思いも回答してもらった。

表 3 質問紙調査の質問項目の概要

設問番号	内容
1~3	所属校の様子
4~8	回答者自身の様子
9	異校種の同僚からの学び
10~12	回答者が望ましいと思う中高一貫像
13	人事交流経験の有無
14	人事交流中の気持ち
15	より良い中高一貫教育のために取り組めること(自由記述)
16	中高一貫校で取り組んでみたいこと(自由記述)
17~20	教職員の属性項目
21	併設学校の授業経験の有無
22	回答者の担当部活動(中高合同か、否か)

## 2. 所属する中高一貫校の現状

大問 1~3 は、所属する中高一貫校の現状についての、教員の理解・評価を調査したものである。大問 1 では所属校の様子を、大問 2 では所属校が大切にしていると考えられる中高一貫教育の理念を、大問 3 では所属校でのリーダーシップの在り方を問うた。

## 2-1. 回答者の所属校の様子

大問 1 の各項目の得点の中央値、平均、分散(及び標準偏差)を算出した。箱ひげ図(図 2)を作成し、回答の分散を視覚化し、5 つのタイプに分けた。

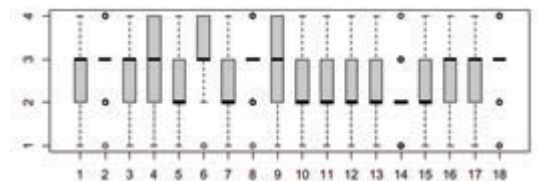


図 2 大問 1 の回答の箱ひげ図

1. 回答が肯定的であり、分散が大きいのか、否定側への広がりほとんどないもの(中央値が 3、第

- 一四分位が中央値と重複する)
2. 回答が概ね肯定的であるが、肯定側にも否定側にも広がりがあるもの(中央値が3、第三四分位と第一四分位が中央値の上下に広がる)
  3. 回答が概ね肯定的であるが、否定側に広がるもの(中央値が3、第三四分位が中央値と重複し、第一四分位が中央値の下に広がる)
  4. 回答が概ね否定的であるが、肯定側に広がるもの(中央値が2、第一四分位が中央値と重複し、第三四分位が中央値の上に広がる)
  5. 回答が否定的であり分散が小さいもの(中央値が2、第三四分位と第一四分位が中央値と重複する)
- 分析にあたっては、フィッシャーの直接確率検定<sup>1</sup>によって学校ごとの結果の独立性を検定したものを補助的に用いた。

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

表4 大問1「御校の御様子をうかがいます。次の項目について、先生御自身のお気持ちに最も近いものをお選びください。」の平均値・標準偏差・中央値・学校ごとの独立性

項目	平均値	標準偏差	中央値	Fisher (学校間)
1. 中高6年間を見通した進路指導がされていると感じる。	2.681	0.728	3	0.03
2. 生徒の望ましい成長のために、発達段階に応じた行事が十分に用意されている。	2.989	0.641	3	0.20
3. 他校と比較して、廊下や教室等の掲示物に工夫がされている。	2.912	0.770	3	0.40
4. 併設学校の同僚の授業を見る機会がよくある。	2.901	0.895	3	0.002
5. 中高の教育内容の連携が十分できていると感じる。	2.451	0.654	2	0.36
6. 高校教員の教科指導は受験学力の向上を重視している。	3.385	0.610	3	0.39
7. 分掌や学年の枠を超えた改善案を出しやすい雰囲気がある。	2.527	0.861	2	0.15
8. 教員の個性や多様性を積極的に評価し、個々の持ち味を伸ばそうとする雰囲気がある。	2.879	0.612	3	0.03
9. 併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある。	2.857	0.961	3	0.0001
10. 6年間を通した教育実践の成果を定期的にふり返り、下の学年への指導につなげている。	2.374	0.784	2	0.65
11. 中等部の教員の意見が全体に反映されている。	2.374	0.694	2	0.47
12. 中高教員で、目指すべき学校像が共有されている。	2.440	0.819	2	0.0007
13. 中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい。	2.121	0.743	2	0.03
14. 高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい。	2.088	0.694	2	0.08
15. 新しく赴任してきた教員が中高一貫について理解を深める機会が十分に用意されている。	2.242	0.735	2	0.42
16. 学習指導や学級経営についての新しい理論や方法を積極的に取り入れていこうとする雰囲気がある。	2.890	0.781	3	0.02
17. 中学校と高等学校は学校組織として一体感をもって教育活動に当たっている。	2.648	0.780	3	0.14
18. 中等部出身の高校生と接して、中等部での特色ある教育の成果を感じることもある。	3.022	0.683	3	0.09

## 2-1-1.タイプ1 回答が肯定的であり、分散が小さいか、否定側への広がりほとんどないもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
2 生徒の望ましい成長のために、発達段階に応じた行事が十分に用意されている。	中	5	13	7	1	19	50	27	4	2.85	69	31
	高	12	44	9	0	18	68	14	0	3.05	86	14
6 高校教員の教科指導は受験学力の向上を重視している。	中	11	15	0	0	42	58	0	0	3.42	100	0
	高	29	32	3	1	45	49	5	2	3.37	94	6
8 教員の個性や多様性を積極的に評価し、個々の持ち味を伸ばそうとする雰囲気がある。	中	3	20	3	0	12	77	12	0	3.00	88	12
	高	8	39	17	1	12	60	26	2	2.83	72	28
18 中等部出身の高校生と接して、中等部での特色ある教育の成果を感じることがある。	中	3	18	4	1	12	69	15	4	2.88	81	19
	高	16	40	7	2	25	62	11	3	3.08	86	14

本節以降、示される集計結果(上図)中、「中」・「高」とあるものは、それぞれ中等部教員、高校教員の結果であることを示している。本文中で、回答数や割合などを所属別に示す場合も、中〇〇%、高〇〇%という略号を使用する。また小数点以下が省略されているものは小数第一位を四捨五入した。

**項目2** 回答は概ね肯定的ではあるものの、高校教員のそれと比較すると中等部教員からの肯定的な回答が少ない。また、学校間で中等部教員の意識にかなり差がある(肯定側が多い学校からそれぞれ91%-60%-40%)。インタビュー調査では、ある中等部の教員が、中学3年生が成長する場が少ないことを懸念しており、上の結果はこの懸念と関係があるのかもしれない。その教員によると、例えば、一般の公立中学校の最上級生は、委員会活動などで後輩を引っ張る経験をするが、中高一貫校では委員会活動を中学生、高校生が一緒に行うため、そのような経験をする機会が少ないのである。

**項目6** 項目6は、肯定的な回答をする教員の割合が最も高かった(92%)項目である。特に中等部所属の教員についてはその全員(100%)が肯定的な回答をしている。国立教育政策研究所(2016)は中等教育学校後期課程、併設型中高一貫校の併設高等学校での卒業生の大学進学率は、一般の普通科高校に比べ高く、過去10年間でよりその傾向が強まっていることを示すが、この回答結果は、実際に所属する教員自身も大学進学を意識した学習指導を重視していることを示している。

**項目8** この項目は、小学校を対象とした露口(2008)の研究で、「集団的配慮」と名付けられた因子との相関が強かった因子を参考にして作成した項目である。結果として、中等部教員にはいずれの学校でも肯定的に答える者が多かった。「教員の個性や多様性」について言えば、インタビュー調査では、ある教員が、学校経営目標を「強く意識」しながら学年・学級経営目標が立てられていく一般の公立中学校では「個人裁量の部分がずっと少ない」が、現在勤務する中高一貫校は一般の公立中学校より「自由度が高い」(中学籍中学校教員)と語っていた。また別の教員は「面白いことをやろう」という気質の教員は、中高一貫校に向くのでは(高校籍高校教員)と話した。とすれば、今回の調査対象校に勤務する中学校教員の多くは、一般の公立中学校でよりも中高一貫校での方が「教員の個性や多様性」は生かされていると感じているのかもしれない。

高校教員については、3校全体では肯定的な回答が多い。しかし、いずれの学校でも中学校教員と比較すると、否定的な回答の割合が若干多く、否定的回答が肯定的回答を上回った学校も1校あった。

**項目18** この項目に対しては全ての学校で肯定的に回答する教員の割合が高く、中等部での教育の成果をほとんどの教員が感じていることが窺われる。この結果から、高校に勤務していても、その教員が中等部から進学してくる生徒との交流を通じて中等部での教育に関心を持ったり、その結果そこから影響を受けたりすることがあり得るのだと言えそうである。



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

## 2-1-2 タイプ2 回答が肯定的であり、肯定側にも否定側にも広がり大きいもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
4 併設学校の同僚の授業を見る機会がよくある。	中	3	14	7	2	12	54	27	8	2.69	65	35
	高	23	22	16	4	35	34	25	6	2.98	69	31
9 併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある。	中	4	15	3	4	15	58	12	15	2.73	73	27
	高	22	21	16	6	34	32	25	9	2.91	66	34

項目4 この項目の得点の中央値は3であるが、70.3%の教員が3か4を選んでいて、ただし、第一四分位は2であり、1を選んだ教員もいる。多くの教員が研修等を通して授業見学を行っているにもかかわらずこのような結果が出たのは、3校のうち1校では4、3が多く選ばれ、1校では3に回答が集中し、1校では2、3がよく選ばれる、というふうに、学校間で回答傾向がやや大きく異なったからである。個人間でよりも学校間で回答傾向が大きく異なっていること、肯定的な回答が多かった2校についてはその特異な研修の様子(異校種の授業の見学が全体研修の中で義務づけられていたり、中高の教員全員が自教科の研究授業の見学を行ったりしている)がインタビュ

ー調査から明らかになっていることを考慮すると、所属校で行われている研修の形態が、この項目への回答の傾向に強く影響していると考えてよい。

項目9 すべての項目の中で学校ごとの独立性が最も高かった項目9は、項目4と同じく、学校経営の在り方が回答傾向に強く影響している項目である。この項目に肯定的であった学校にプロジェクトチームがあることはインタビュー調査でも知られていた。学校間での差が大きい項目4、項目9の回答傾向は、逆に言えば、これらの項目で表されているような状況が、学校経営の工夫の有無に関わらず自然発生するようなものではないということも示している。

## 2-1-3.タイプ3 回答が肯定的であるが、否定側に広がり大きいもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高6年間を見通した進路指導がされていると感じる。	中	2	15	9	0	8	58	35	0	2.73	65	35
	高	8	31	22	4	12	48	34	6	2.66	60	40
3 他校と比較して、廊下や教室等の掲示物に工夫がされている。	中	4	12	9	1	15	46	35	4	2.73	62	38
	高	17	31	16	1	26	48	25	2	2.98	74	26
16 学習指導や学校経営についての新しい理論や方法を積極的に取り入れていこうとする雰囲気がある。	中	6	9	11	0	23	35	42	0	2.81	58	42
	高	14	35	13	3	22	54	20	5	2.92	75	25
17 中学校と高等学校は学校組織として一体感をもって教育活動に当たっている。	中	2	11	12	1	8	42	46	4	2.54	50	50
	高	9	32	19	5	14	49	29	8	2.69	63	37

項目1、項目16は、学校によって有意の差がみられた。

項目1 項目1に対しては、2つの学校が概ね肯定的な回答傾向を、1つの学校が否定的な回答傾向を示した。

項目3 3校中1つの学校の中等部教員のみ否定的な回答が顕著に多かったので、その背景を考察したい。この学校でのインタビュー調査では、「学校の中の掲示物が少ない」という中等部教員の声聞いた経験があるという話(高校籍中学校教員)や、高校教員であっても人事交流で中等部に来ているときには教室内の掲示物について工夫を考えた方がよいという話(高校籍高校教員)を聞くことができた。しかしながら、別の学校の教員へのインタビューでは、発達障害を持つ子どもたちの集中力に差し支えないよう、掲

示物をなるべく簡素化する方針が中学校でも採られていたということが語られた(高校籍中学校教員)。それらを合わせ考えると、この回答結果は地域の中学校での掲示物に関する考え方とも関わりがあると推測される。そして、当該地域の中学校文化を高校教員が理解していない場合、それが中学校教員の所属校に対する否定的な評価につながっていると考えられる。

項目16 この項目は、露口(2008)で「集団的インスピレーション」と名付けられた因子と強い相関を持っていた因子を参考にして作成した項目である。結果、アクティブラーニングユニットを組み、公開授業などにも組織的に取り組んでいるC校で肯定的な回答を多く得た(中等部教員、高等学校教員ともにその9割近くが肯定的な回答をした)。C校では研修によつ

て、その創造的・革新的な組織文化が醸成されているのだと考えられよう。B校の回答傾向には、中学校教員の間では賛否が分かれ、高校教員の間では肯定的な見方が支配的(8割近く)であるという特色が見られ

た。B校では授業研修が中等部の教員を核として行われ、その影響によって、主として高等学校で、学習指導や学級経営についての変革がなされている。

項目17については、次項で分析する。

2-1-4.タイプ4 回答が否定的であるが、肯定側に広がり大きいもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
5 中高の教育内容の連携が十分できていると感じる。	中	2	6	18	0	8	23	69	0	2.38	31	69
	高	3	28	31	3	5	43	48	5	2.48	48	52
7 分掌や学年の枠を超えた改善案を出しやすい雰囲気がある。	中	2	7	14	3	8	27	54	12	2.31	35	65
	高	12	21	27	5	18	32	42	8	2.62	51	49
10 6年間を通じた教育実践の成果を定期的にふり取り、下の学年への指導につなげている。	中	3	9	11	3	12	35	42	12	2.46	46	54
	高	2	27	27	9	3	42	42	14	2.34	45	55
11 中等部の教員の意見が全体に反映されている。	中	0	11	12	3	0	42	46	12	2.31	42	58
	高	3	25	32	5	5	38	49	8	2.40	43	57
12 中高教員で、目指すべき学校像が共有されている。	中	3	7	12	4	12	27	46	15	2.35	38	62
	高	4	31	22	8	6	48	34	12	2.48	54	46
13 中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい。	中	2	7	12	5	8	27	46	19	2.23	35	65
	高	1	15	37	12	2	23	57	18	2.08	25	75
15 新しく赴任してきた教員が中高一貫について理解を深める機会が十分に用意されている。	中	1	8	12	5	4	31	46	19	2.19	35	65
	高	3	18	37	7	5	28	57	11	2.26	32	68

項目5 項目5の回答はやや否定的なものであった。学校間の独立性について統計的に有意な差はなかったものの、C校教員の回答が比較的肯定的であったため肯定側に回答が広がった。C校教員の回答傾向に関して言うと、同校関係者へのインタビュー調査によれば、この学校では6年間を通じた「Can Do リスト」が作られており、それによって、望ましい生徒像が各教科で漠然と形成されてきている(中学籍中学校教員)。項目5をC校教員の多くが肯定した背景には、この取り組みがあるのではないかと思われる。

項目12 この項目の得点と、前項の項目17の得点との間には0.61<sup>2</sup>というやや強い相関があり、両者の得点は、中等部教員と高等学校教員との連携の強度として解釈してよいだろう。ただし、組織に一体感がある(項目17)ことと理念が共有されている(項目12)こととは必ずしも同じではないということなのか、項目17より項目12の方に否定的な回答が多かった。

また項目12の回答傾向には学校間で違いが見られる。特に、ここ数年進学指導に力を入れているC校では肯定的に回答する者が多かった(中等部教員、高校教員ともに7割以上)。全体で見ると、中等部教員、高等学校教員のいずれについても、肯定的に回答したのは4割強であるからこの割合は顕著に高い。これに関してはインタビュー調査でも、C校を進学校にしていきたいという管理職や他の教員の思いを感

じている(中学籍高校教員)とある教員が語っており、項目12の回答結果からはその実態が客観的に確かめられよう。またここから、学校経営への取り組み方次第で、中学校教員と高等学校教員とが目指すべき学校像を共有することは十分可能であるとも言えようである。

なお中等部教員、高校教員が中高一貫教育の改善に向け共に取り組めることを尋ねた項目15には、理念の共有ということに関わって以下の記述があった。

生徒が高校を卒業する時のビジョンを共有し、それに必要な学力や人間性を身につけるための指導とは何かをしっかりと考え実践していくこと。

(高校教員)

この記述には、理念の共有をまず行い、そしてあくまでその理念に立脚してカリキュラムを作っていくという、カリキュラム作りにおいて本来踏まれるべき過程の重要性を理解している教員の存在が確かに窺われる。とすれば、中高教員が教育理念を共有することのみならず、その理念とカリキュラムとの理想的な関係を実質化していくことの契機も、現在の中高一貫校の中に十分見出せるものと考えられる。

項目10 項目10の「6年間を通じた教育実践の振り返り」に関わっては、項目15の自由記述欄にそれに必要な情報収集への言及があったことが注目される。

生徒の6年間の成長(性格や人間関係の把握)を追

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

うこと。(高校教員)

6年間を通じた生徒の個人研究。(高校教員)

試験結果等に関する情報共有。入学時から卒業までの追跡調査。(高校教員)

表現は異なるが、いずれも、中高の教員が協力し、

生徒の6年間の生徒の成長について情報共有を行うことを指している。これらの記述は、まだ十分実現しているとは言えない「6年間を通じた教育実践の振り返り」を充実させるための環境が、多くの教員に求められていることを示しているように思われる。

## 2-1-5.タイプ5 回答が否定的であり分散が小さいもの

	4 そう思う, 3 まあそう思う, 2 あまりそう思わない, 1 そう思わない				回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
	4	3	2	1	4	3	2	1	4	3	2	1			
14 高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい。	1	6	14	5	4	23	54	19	2.12					27	73
	1	14	39	11	2	22	60	17	2.08					23	77

項目 13・14 肯定的な回答の割合が最も低く、標準偏差も小さかったものは項目 14 である。前節の項目 13「中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい」は肯定的な回答が中央値の 2 よりも上位で多いためタイプ 4 となったが、この 2 項目の相関関係は 0.86 と高い。自らが異校種に対して「教育内容の決定過程」が見えないと感じている教員は、異校種の教員も同じように感じているだろうと考えるのかもしれない。3つのうちのどの学校についても中央値が 2 であったから、この項目の内容は A 県における併設型中高一貫校共通の課題である。

またこの 2つの項目と項目 12「中高教員で、目指すべき学校像が共有されている」との間にも、それぞれ 0.60(項目 14)、0.61(項目 13)と、やや強い相関がある。項目 12(「中高教員で、目指すべき学校像が共有されている」と項目 13・項目 14 の因果関係については即断できないが、「目指すべき学校像」を、「どのような生徒を育てる学校であるべきだと考えるか」と仮定すると、「教育内容の決定過程」は、まさしく「目指すべき学校像」に対し、現実の生徒を対象として行われようとする「教育内容」の有効性を照らし合わせるプロセスそのものである。「目指すべき学校像」が共有されていないならば、たとえ「教育内容の決定過程」を会議等で説明されても、その「過程」の透明性を実感できないと考えられる。

## 2-1-5.分類からの示唆

調査結果に基づいた分類を通じて、教員が共通して肯定的に回答している項目と、共通して否定的に回答している項目があるということが見える。それらをさらに分散の大きさによって分けると、表 5 の

ようなマトリックスに整理される。

表 5 中高一貫校の状況とその実現の難易

	分散大	分散小
中央値が高い	取り組みによっては、早期に実現が見込まれる状況(タイプ 2, 3)	中高一貫校で、実現されやすい状況(タイプ 1)
中央値が低い	取り組みによっては、実現がする可能性がある状況(タイプ 4)	中高一貫校で、実現が難しい状況(タイプ 5)

## 2-2.項目の因子による分類

中高一貫教育の推進に関わる大問 1 の項目群について、最尤法・バリマックス回転による因子分析を行った(表 6)<sup>3</sup>。因子数を 1~2 増やしても、累積寄与率は極端には上がらず(.58, .61)、因子数 3 のモデルを説明力が高いものとして採用した。その結果が表である。なお項目 6 は中高一貫教育の推進とは関係がなく、項目 3 も地域差による可能性がある(前節参照)ので除外した。

この分析によって得られた因子を次のように名付けた。

因子 1 中高の教員の境界横断の文化(境界横断文化)

因子 2 6年間を見通したカリキュラム(カリキュラム)

因子 3 中高の教育活動に関する情報の組織的共有(情報共有)

因子 1 は中高の教員が接触し、互いの教育活動の良さを取り入れようとしている状況を示すものだと考えた。因子 2 は中高 6 年間の教育活動が計画的に

実施されている状況を、因子3は中高の教育活動をより効果的にするための情報が共有されている状況を示すものだと考えた。因子負荷量が0.4以上のものに○をつけて、見やすいものにしたのが**表7エラー! 参照元が見つかりません**。である。参考までに、前節

でみた箱ひげ図を元にしたタイプと肯定的な回答の割合も付している。

3つの要素は、完全に独立性を持つものではないが、これらを、中高一貫教育推進のための3要素と考え、学校経営の指標とすることが可能である。



表6 大問1の因子分析

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
1. 中高6年間を見通した進路指導がされていると感じる。		<b>.98</b>	.14	0.995
2. 生徒の望ましい成長のために、発達段階に応じた行事が十分に用意されている。	.21	<b>.45</b>	.14	0.267
4. 併設学校の同僚の授業を見る機会がよくある。	<b>.43</b>		.15	0.208
5. 中高の教育内容の連携が十分できていると感じる。	.32	<b>.51</b>	.31	0.463
7. 分掌や学年の枠を超えた改善案を出しやすい雰囲気がある。	<b>.58</b>	.25	.16	0.426
8. 教員の個性や多様性を積極的に評価し、個々の持ち味を伸ばそうとする雰囲気がある。	<b>.52</b>	.14	.15	0.311
9. 併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある。	<b>.65</b>	.14		0.447
10. 6年間を通した教育実践の成果を定期的にふり返り、下の学年への指導につなげている。	<b>.44</b>	<b>.47</b>	.33	0.522
11. 中等部の教員の意見が全体に反映されている。	<b>.54</b>	.15	.39	0.47
12. 中高教員で、目指すべき学校像が共有されている。	<b>.53</b>	.37	<b>.43</b>	0.604
13. 中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい。	.21	.23	<b>.95</b>	0.995
14. 高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい。	.34	.30	<b>.76</b>	0.787
15. 新しく赴任してきた教員が中高一貫について理解を深める機会が十分に用意されている。	<b>.56</b>	.27	<b>.44</b>	0.58
16. 学習指導や学級経営についての新しい理論や方法を積極的に取り入れていこうとする雰囲気がある。	<b>.55</b>	.37	.14	0.459
17. 中学校と高等学校は学校組織として一体感をもって教育活動に当たっている。	<b>.61</b>	.38	.36	0.646
18. 中等部出身の高校生と接して、中等部での特色ある教育の成果を感じることがある。	.37	<b>.46</b>	.20	0.385
寄与	3.42	2.62	2.53	
寄与率	.21	.16	.16	
累積寄与率	.21	.38	.54	

表7 大問1の因子による分類

項目	タイプ	肯定的回答	境界横断	対峙型	情報共有
1. 中高6年間を見通した進路指導がされていると感じる。	3	61.5%		○	
2. 生徒の望ましい成長のために、発達段階に応じた行事が十分に用意されている。	1	81.3%		○	
3. 他校と比較して、廊下や教室等の掲示物に工夫がされている。	3	70.3%			
4. 併設学校の同僚の授業を見る機会がよくある。	2	68.1%	○		
5. 中高の教育内容の連携が十分できていると感じる。	4	42.9%		○	
6. 高校教員の教科指導は受験学力の向上を重視している。	1	95.6%			
7. 分掌や学年の枠を超えた改善案を出しやすい雰囲気がある。	4	46.1%	○		
8. 教員の個性や多様性を積極的に評価し、個々の持ち味を伸ばそうとする雰囲気がある。	1	77.0%	○		
9. 併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある。	2	68.1%	○		
10. 6年間を通じた教育実践の成果を定期的に戻り、下の学年への指導につなげている。	4	45.1%	○	○	
11. 中等部の教員の意見が全体に反映されている。	4	42.9%	○		
12. 中高教員で、目指すべき学校像が共有されている。	4	49.5%	○		○
13. 中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい。	4	27.5%			○
14. 高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい。	5	24.1%			○
15. 新しく赴任してきた教員が中高一貫について理解を深める機会が十分に用意されている。	4	33.0%			○
16. 学習指導や学級経営についての新しい理論や方法を積極的に取り入れていこうとする雰囲気がある。	3	70.3%	○		
17. 中学校と高等学校は学校組織として一体感をもって教育活動に当たっている。	3	59.3%	○		
18. 中等部出身の高校生と接して、中等部での特色ある教育の成果を感じることもある。	1	84.6%	○		

公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

2-3.中高一貫校として大切にしていると思われるもの

2. 御校が中高一貫校として大切にしていると思われるものは何だと感じますか。2つまでお選びください。

	回答数	回答数/回答総数
1 高校入試の影響を受けずゆとりある安定した生活を送れること	中 9 高 20	35% 31%
2 継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること	中 13 高 32	50% 49%
3 継続した指導によって効果的な教育を可能にし、大学進学の実績をより伸ばすこと	中 9 高 29	35% 45%
4 異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること	中 12 高 27	46% 42%
5 中等部で安定した人間関係づくりをすすめ、生徒の高校入学時の精神的負担を減らすこと	中 4 高 11	15% 17%
その他:	中 部活動の継続した指導。 高 中高職員による連携会議。	

大問2の項目1から項目4は、平成9年6月の中央教育審議会第2次答申で「中高一貫教育の利点」として挙げられたものを基にして作成したもので、回答者には5つのうち2つを選択してもらった。項目2~4の間で、選択される割合の差は大きくはなかったが、項目2は中高教員それぞれの約半数の者に選択された。相対的に選択されにくかったのが項目1、5である。項目1の内容は、答申で中高一貫校の利点の筆頭に挙げられたものであるが、回答の中では低い優先順位しか与えられていない。項目5は答申では利点に挙げられてはいなかったものの、15%程度の教員には中高一貫校で大切にしていることとして認識されていた。この大問については後の節で詳述する。

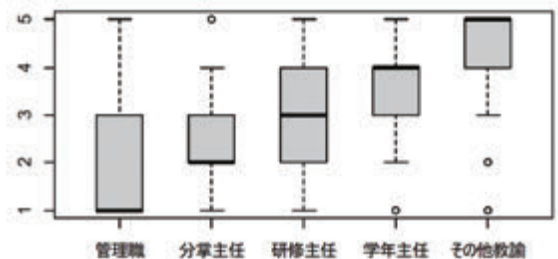


図3 大問3「改善提案」の回答の箱ひげ図(縦軸は順位)

大問3は「御校では教育活動の改善提案はどなたから出されることが多いと感じますか」という質問である。他の設問と異なり順位を答える問であるため、4件法よりも平均値の差は大きくなる。全体の順番(括弧内は平均順位、少数第二位を四捨五入)としては次のようになっている。

管理職(1.989)－分掌主任(2.538)－研修主任(2.824)－学年主任(3.319)－上記主任ではない教諭(4.330)

2.4 改善提案の発信者

表8 改善提案の発信者として選ばれた職

職	1位	2位	3位	4位	5位	平均順位
管理職(校長・副校長・教頭)	53%	18%	13%	11%	5%	1.989
分掌の主任(研修主任をのぞく)	18%	41%	18%	19%	5%	2.538
研修主任	15%	21%	37%	19%	8%	2.824
学年主任	7%	14%	29%	42%	9%	3.319
上記主任ではない教諭	8%	7%	3%	10%	73%	4.33

しかし、管理職と研修主任については分散が大きく、フィッシャーの直接確率検定によって独立性を検定した結果、5%水準で有意な差があり、学校によって異なる分布が見られる。全体結果と比較して、顕著な一例を表9に挙げた。前表と比較してほしい。

表9 「改善提案」する職の学校による相違の例

学校	職	1位	2位	3位	4位	5位	平均順位
C校	管理職(校長・副校長・教頭)	81%	0%	6%	3%	10%	1.613
B校	研修主任	30%	18%	28%	15%	10%	2.575



管理職(p 値=0.0001)は、最近校長のかけ声で中高一貫の組織改革が進んだ C 校の回答で特に 1 位を与えられていた。その他の学校の回答の中では、最頻値は 1 だったものの中央値は 2 となっていて、2 位以下にも広がりが見られる。研修主任(p 値=0.04)の順位について言うと、中等部の研修主任をプロジェクトリーダーとして授業改善を進めている B 校の回答では、中央値は 3 であるものの、1 位、2 位にも回答が広がっていた。2.575 という平均値は校長の 2.200 に迫るであり、研修主任以外の分掌の主任を抜いて 2 位で

あった。以上の結果から、改善提案は、管理職、分掌主任、研修主任といった、学年・学級を横断する職務についている教員から出されることが多いが、その体制には学校間で違いがあることが明らかになった。

3. 協働に関わる中高教員の意識

大問 4 では、中高一貫校における協働の側面について意識調査を行った。

3-1. 中高一貫校での戸惑い

	回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
	4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高一貫校以外の公立中学校（高等学校）との違いに戸惑いを感じる。	中 8	14	4	0	31	54	15	0	3.15	85	15
	高 11	27	19	8	17	42	29	12	2.63	58	42

項目 1 は、異校種の学校や教員への戸惑いではなく、中高一貫校とそれ以外の公立学校との違いへの戸惑いに注目した項目である。この回答結果からは、「戸惑い」を感じる者は高等学校教員より中等部教員に多いことが認められる。インタビュー調査では、採用時に籍を置いた校種とは異なる校種に人事交流中の複数の教員が「戸惑い」を語ったのはもちろんだが、中等部所属の複数の中学籍教員の「戸惑い」が大きいことを語っていた。

表 10 中等部教員の在籍年数における「戸惑い」の変化(数値は人数)

回答	1~2年	3~4年	5~6年	7~8年	9~10年	11年以上
4	5	0	1	2	0	0
3	4	5	3	2	0	0
2	3	1	0	0	0	0
1	0	0	0	0	0	0

この要因については、A 県では中学校の異動の方が高校の異動よりも頻度が大きく、回答者のうち 5 年以上勤務している教員の割合は、中等部で 31%、高校で 57%と差があることから、中等部教員の方がより中高一貫校に慣れていない可能性もある。

表 10 によると、回答者のうち、7~8 年が最長の在籍年数である。しかし、在籍が長くても「戸惑い」を感じている。むしろ「戸惑いを感じる」ということに否定的な「2.あまりそう思わない」を回答したのは、在籍年数の短かった教員である。

一方、インタビューの一人は「文化の違い」(具体的には「組織としての動き自体」、中学籍中学校教員)が「戸惑い」の要因だと語っていた。調査対象校のいずれもが、伝統のある高等学校を併設型中高一貫校に改編し、新規に併設中学校を開校しているわけで、母体となった高等学校の文化や分掌組織(インタビュー調査を行うことのできた 2 校では、分業組織は中高で一体となっていた。)が中等部においても適用され、それが同じ校種であっても、中学校教員戸惑いを感じる理由になっている可能性もある。

以上の分析から明らかなのは、中等部教員が高校教員よりも中高一貫校に戸惑いを感じている大きな要因は、ただ異動先の学校に不慣れであるからだけではなく、調査対象校の併設型中高一貫校が、高校教員よりも中学校教員に、より親和性の低いものである点にあるということである。

そこで、中等部教員について、在籍年数ごとに度数分布表を作成した。

同様に、高校教員に関しても、在籍年数の長い教員が『戸惑い』を抱いていないわけではない。長年に亘って中高一貫校に在籍したとしても、「戸惑い」を感じさせるものが併設型中高一貫校にはあるといえる。

ただし、項目 1 と大問 4 における他の項目との間に強い相関はなく、「戸惑い」ゆえに教育活動に消極的になってしまうわけではないだろう。



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

## 3.2.併設学校への提案

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
2 分掌会議では疑問に思うことや正しいと思うことは積極的に発言し、共通理解に向け努力することができる。	中	3	15	7	1	12	58	27	4	2.77	69	31
	高	15	30	16	4	23	46	25	6	2.86	69	31
3 学年会議では疑問に思うことや正しいと思うことは積極的に発言し、共通理解に向け努力することができる。	中	16	9	1	0	62	35	4	0	3.58	96	4
	高	19	38	6	2	29	58	9	3	3.14	88	12
4 併設学校の同僚と仕事上の色々な話をするところがある。	中	8	13	5	0	31	50	19	0	3.12	81	19
	高	15	34	13	3	23	52	20	5	2.94	75	25
5 仕事以外のことで併設学校の同僚と話をするところがある。	中	7	12	5	2	27	46	19	8	2.92	73	27
	高	10	30	22	3	15	46	34	5	2.72	62	38
6 併設学校の学校行事や生活指導について、関心がある。	中	6	17	2	1	23	65	8	4	3.08	88	12
	高	17	35	10	3	26	54	15	5	3.02	80	20
7 併設学校の行事や生活指導について、疑問に思ったことを聞いたり、よいと思ったことを提案したりすることができる。	中	2	10	11	3	8	38	42	12	2.42	46	54
	高	7	28	24	6	11	43	37	9	2.55	54	46
8 担当授業以外で併設学校の生徒の教科指導に関わることができる。(補習、特別授業等)	中	1	6	5	14	4	23	19	54	1.77	27	73
	高	11	18	13	23	17	28	20	35	2.26	45	55
9 併設学校の生徒の生徒指導に関わることができる。	中	2	4	8	12	8	15	31	46	1.85	23	77
	高	9	16	19	21	14	25	29	32	2.20	38	62
10 生徒に関わることで、併設学校の教員に相談にのってもらえるところがある。	中	3	16	3	4	12	62	12	15	2.69	73	27
	高	12	25	20	8	18	38	31	12	2.63	57	43
11 自分の分掌の仕事を積極的にに行い、改善すべき点を見つけ、改善するよう働きかけることができる。	中	5	10	9	2	19	38	35	8	2.69	58	42
	高	17	33	11	4	26	51	17	6	2.97	77	23

併設学校との境界横断に関する意識調査が大問 4 である。この大問の項目は、淵上(2004)における「協働的効力感」の分析で使用された、「学校改善の意欲」因子との間に強い相関のある項目(「自分の分掌の仕事積極的にを行い、すすんで改善すべき点を見つけ、改善するよう働きかけることができる」及び「会議では疑問に思うことや正しいと思うことは積極的に発言し、共通理解に向け努力することができる」)と、「普段のコミュニケーション」因子との間に強い相関のある項目(「仕事以外のことで多くの同僚と話をするので普段から関係づくりに努めることができる」)を基に作成した。

大問 4 と、所属校の現状に対する認識を調査した大問 1 の各項目について、やや強い相関がみられる(>0.4)ものをネットワーク図にしたのが図 4 である。

項目 7 の「併設学校の行事や生活指導について、疑問に思ったことを聞いたり、よいと思ったことを提案したりすることができる」という選択肢を選んだ教員は、中高一貫校における「学校改善意欲」が高いと考えられる。この項目についての分散には、学校間でも中高の教員間でも有意差が見られなかった。図 4 をみると、様々な状況(大問 1 の項目 7・項目 11)や機会(大問 4 の項目 4・項目 8・項目 9)とも相関関係があることが注目される。また、個人的資質(大問 4 の項目 2・6・11)だと考えられる項目が、「同僚の授業を見る機会がよくある」や「併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある」という項

目につながっていることを考えれば、研修方法・校内人事次第で、一見個人的資質と考えられそうな、境界横断的な取り組みを推進する意欲や能力が向上することもありそうである。このことは、中高一貫校にイノベーションを起こす人材の育成を考えるうえで、1つの手がかりとなるかもしれない。

一方で、併設学校の教員とコミュニケーションを取っていたり併設学校への関心を持っていたりしても、実際に教育活動に関わったり、教育活動への提案をしたりすることはかなり難しいことなのだということが、項目 7・8・9 の結果から明らかになった。なお項目 8 と項目 9 との間にはやや強い相関がある。教員は、自分が教科指導をした生徒に対しては生活の場面でも指導を行うところがあるのかもしれない。

また、項目 2・3 からは、学年会議においては「改善意欲」を持つ教員が多く見られることと比べると、分掌会議において「改善意欲」を持つ教員の割合は中高ともに低いことがわかる。その落差は中学校教員のものの方が大きい。ここには前節でも述べた、高等学校の分掌体制に対する中学校教員の戸惑いが影響しているのかもしれない。また学年会議において積極性があることを示す項目 3 と項目 7 との間には、弱い相関しかない(0.33)ことが注目される。自校種にかかわることには積極的に発言できる教員にとっても、併設学校のことについて積極的に発言したり、共通理解に向け努力したりすることは必ずしも容易ではないのだろう。

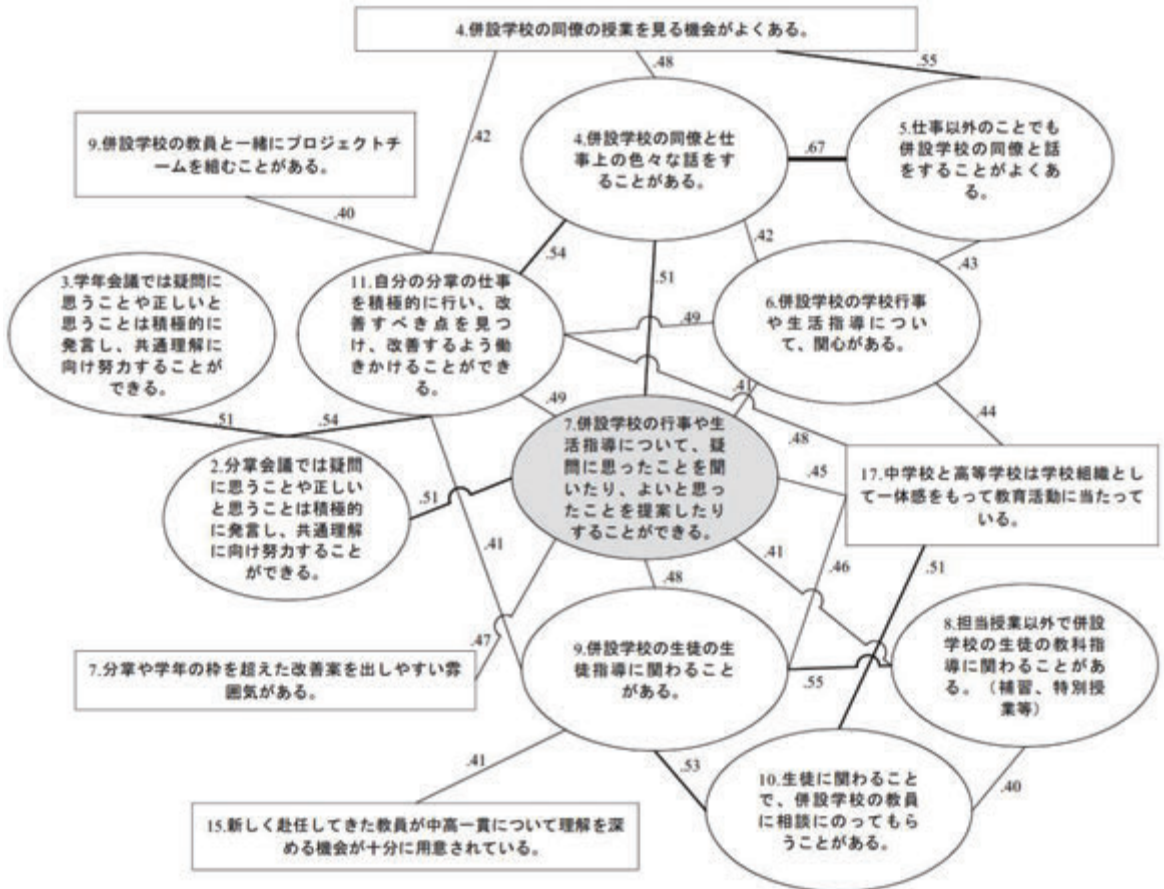


図4 大問1(角囲み)、大問4(丸囲み)についての項目間相関(筆者作成)

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

## 3-3.異校種との界面

では、併設型中高一貫校の教員は、併設学校の教員に関わったり、併設学校の教育活動を知ったりする

ために、どんな機会を利用しているのだろうか。それを調査したのが大問の5、6、8である。

## 3-3-1.異校種教員との接点

5. 併設学校の同僚と関わりを持つきっかけになったものとして主なものを3つ選んで下さい。		
	回答数	回答数/回答総数
1 教科が同じ	中 23 高 54	88% 83%
2 分掌が同じ	中 12 高 36	46% 55%
3 部活が同じ	中 13 高 28	50% 43%
4 職員室の座席が近い	中 4 高 12	15% 18%
5 同じ生徒を担当している	中 8 高 22	31% 34%
6 同じプロジェクトに関わった	中 4 高 13	15% 20%
7 研修会で同じグループになった	中 2 高 11	8% 17%
8 自分が併設学校に在籍したことがある	中 2 高 6	8% 9%
9 懇親会やレクリエーションで親しくなった	中 7 高 9	27% 14%
その他:	中 特にかっけはなく自然にそうなった、TTとして同じ授業に入っている、年齢が近い、 高 共通の知人がいる、役職立場に近い、中等部入試、授業を担当している。	

大問5では、担当教科が同じであることをきっかけに関わりをもっているという回答が中高ともに多かった。中高一貫校では教科指導の連続性が重視されているからだろう。とはいえ、組織構成上、どの教員も担当教科・分掌組織・部活のいずれかで必ず併設学校教員と関わりを持つから、この3つが多く選択されることは驚くべき結果ではない。注目されるのは、項目5『同じ生徒を担当している』を、30%以上の教員が選んでいることである。インタビュー調査からは、併設校の授業を担当している教員がクラス担任に話を聞くことがある（高校籍中学校教員）ということが分かったが、これについて一般化の可能性を検証するため、表11に、併設校の授業の担当の経験と項目5の選択との関係を示す。

表11 同じ生徒を担当している併設学校の教員と関わりをもつことと併設学校の授業担当経験との関係

項目5	TTで担当	単独で担当	担当したことはない
非選択	7	22	32
選択	3	19	8

単独で授業を担当した教員の約半数は項目5を選択しており、この割合は、TTで担当したことのある教員、併設校の授業を担当したことのない教員のいずれのそれよりも高い。フィッシャーの直接確率検定でも、5%水準で有意な違い(p値=0.047)があった。この項目で1~9の選択肢を選ばず、「その他」として「TTとして同じ授業に入っている」「授業を担当している」と記述した教員も項目5を選択したのと同様だと言ってもよい。教科・分掌組織・部活の枠組みを超え、生徒を通じて、併設学校の教員と関わりを持つ、中高一貫校の教員像が見えてくるといえよう。

また、「職員室の座席が近い」や「懇親会やレクリエーションで親しくなった」という選択肢がそれぞれ18%の教員に選択された。これに関わっては、インタビュー調査で、高校籍の校長が職員室で中等部の職員に近いところに座席を用意したという話（高校籍高校教員）が聞けたことから、併設校の管理職同士や併設校の職員同士が接触しやすいよう座席配置を工夫する学校があることも分かっている。懇親会については詳らかにできないが、B高では中高の職員が同じテーブルに着くような工夫もなされている。

3-3-2.異校種の教育活動を知る媒介物

6. 併設学校の教育活動の様子をどのようにしてお知りになりますか、主なものを3つまで選択してください。

		回答数	回答数/回答総数
1 ホームページ	中	3	12%
	高	5	8%
2 生徒との会話	中	10	38%
	高	29	45%
3 会議や打合せ	中	22	85%
	高	54	83%
4 同僚との会話	中	20	77%
	高	58	89%
5 学年便り	中	0	0%
	高	7	11%
6 研修	中	10	38%
	高	16	25%
その他:	中	授業、	
	高	通りがかりに、年間行事予定表、個別に関心のあることを聞く、職員室での教員や生徒の会話、	

大問6については、項目3・4を選んだ回答者が多かった。多くの教員が、公的に設定された「会議や打合せ」、異校種教員間の直接のコミュニケーションである「会話」を選ぶことは予想されたが、3つめの選択肢として何を選ぶかに注目したい。結果として、項目2の「生徒との会話」を選んだ回答者が多かった。具体的な併設学校の生徒との会話の頻度については次項で分析する。

「研修」という回答も中学校教員の約4割、高校教員の約3割が選択していて、併設学校の教育活動を理解するために有効な手段となっていることがうかがわれる。自由記述では「よりよい中高一貫教育を行うため」に中高の教員が協働してできることとして、

研修で話し合いを持つこと。しかし、研修を多くすることではない。(B校高校教員)

ということが挙げられていた。研修が増えることに

は抵抗感を持つが、近年B校で推進されてもいる話し合いを中心とした研修に中高一貫教育推進の意義を認めている様子がわかる。研修で行われている授業見学も異校種の教育活動を知るためには有効だろう。

注目したいのが、中等部の教員の発行する学年便りで併設学校の様子を知る高校教員がいることである。調査対象のA県の中学校では、学年ごとの学年便りが発行されることが多い。また、筆者の勤務経験によれば、中学校の学年便りは、生徒の声が掲載されることも多く、教員の願いと生徒の反応を知るうえで絶好の資料となる。回答結果は、高校の教員にまで学年便りを配布している学年主任の存在を示している。こうした動きを広めることによって、より多くの教員が、併設学校のカリキュラムだけでなく、教員の生徒指導観についても理解を深める可能性がある。

3-3-3.併設学校の生徒との会話

8. 授業以外で併設学校の生徒と会話することがどれくらいありますか。

		回答数
1 日常的にある	中	12
	高	33
2 週に1度程度ある	中	6
	高	5
3 月に1度程度ある	中	1
	高	12
4 ほとんどない	中	7
	高	15

中

高



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

表 12 併設学校の生徒との会話頻度と担当部活の構成との関係

併設学校の生徒との会話	中高合計		高校		中等部	
	合同	別々	合同	別々	合同	別々
1 日常的にある	24(57%)	21(43%)	19(61%)	14(41%)	5(45%)	7(47%)
2 週に1度程度ある	9(21%)	2(4%)	5(16%)	0(0%)	4(36%)	2(13%)
3 月に1度程度ある	4(10%)	9(18%)	4(13%)	8(24%)	0(0%)	1(7%)
4 ほとんどない	5(12%)	17(35%)	3(10%)	12(35%)	2(18%)	5(33%)
合計	42	49	31	34	11	15

大問 8 は、教員が併設学校の生徒と会話を持つ頻度を調査したものである。授業の場面以外で併設学校の生徒と会話することが日常的にある教員は中高ともに約半数だった。特に、中等部教員のうち、週に1度程度以上の頻度で併設学校の生徒と会話を持つ者の割合は2/3に上る。

この大問の回答結果には、その教員が中高合同の部活を担当しているかどうかが大きく影響していることがわかった。

表 12 併設学校の生徒との会話頻度と担当部活の構成との関係を見ると、高校教員の中では、中高合同で活動する部を担当する回答者の77%が週に一度程度以上会話をしていると回答したのに対して、合同の部活を担当していない回答者で週に一度程度以上会話をしているのは41%にとどまっている。中等部教員も高等学校ほど顕著ではないが、同様の傾向がある。大問 6 の結果において併設学校の教育活動の

様子を「生徒との会話」から知る教員が意外と多かったことを考えると、中高合同の部活を担当しているかどうかは併設学校の教育活動の理解を深める機会が得られる頻度に関わっている可能性もある。中高合同で活動する部活を担当していない場合、中等部教員の方が「日常的にある」「週に1度程度ある」と回答した者の割合が多かったのは、高校生が中学生だったときに教科担任等の関わりがあった生徒と言葉を交わす機会がより多いからだろう。

## 4. 指導に関わる中高教員の意識

大問 7 は教科指導や生徒指導における教員の意識を調査したものである。「戸惑い」に関する項目である大問 4 の項目 1 (3-1 参照) との関係性も探りたい。

## 4.1. 中高教員の意識差が大きい項目

	4 そう思う, 3 まあそう思う, 2 あまりそう思わない, 1 そう思わない	回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
1 一般の公立学校よりも学力差が大きく、授業に困難がある。	中	2	3	11	10	8	12	42	38	1.88	19	81
	高	28	18	14	5	43	28	22	8	3.06	71	29
8 中等部は高校入試がないため、ゆとりをもって授業が展開できる。	中	4	7	11	4	15	27	42	15	2.42	42	58
	高	6	41	14	4	9	63	22	6	2.75	72	28
10 中等部は、高校があるため、一般の公立中学校よりも生活のきまりが守られにくいように感じられる。	中	6	11	5	4	23	42	19	15	2.73	65	35
	高	7	13	34	11	11	20	52	17	2.25	31	69

項目 1 中等部教員と高校教員とで正反対の結果が出た。中等部の教員は学力差をあまり問題にしていない一方で、高等学校の教員はこれに強い問題意識を持っているということがわかる。ただし、インタビュー調査では、中等部に所属する高校籍の教員が、授業を行う際に非常に驚いた点が学力差であったと語る例も見られた。

一般の公立中学校は入学者選抜を行わないため、中高一貫校よりも多様な生徒を集めている。公立中高一貫校の入学者選抜は学力検査でなく適性検査によるものではあるが、選抜がある以上中等部入学時点の生徒の学力水準をそれが程度担保していると考えられる。それに対して、内部進学生に入試を課さない高等学校は、一般の公立高校と異なり、中等

部3年間で学力差が広がった生徒をそのまま受け入れるため、学力差の大きな生徒集団を抱えることになる。中学籍の教員にとってそれほど驚くことはない学力差が、高校籍教員にとっては、授業をする上での困難になっているのである。ただし、この項目と中高一貫校における高校教員の「戸惑い」の項目(大問4の項目1)には弱い相関しかない(中0.23、高0.27)。

**項目8** 一方、中等部のゆとりについては中等部教員で否定的な回答が多かった。インタビュー調査においては、中学校を経験した複数の高校籍教員から、中等部の教員は学力伸長へのプレッシャーがあるのでという意見があり、また中等部教員からは外部テストへの抵抗感も語られていた。しかしながら、項目3の中等部教員の結果をみると、学力へのプレッシャーを感じている教員は全体の42%にとどまった。インタビュー調査で主たるプレッシャーの原因だとされていた外部試験の科目が国語・数学・英語に限られているからだという可能性がある。残念ながら、本調査では匿名性を高めるため、担当教科については調査しなかったため、検証できない。

中等部のゆとりが感じられていないことの原因は現実的な時間数の少なさにある可能性もある。インタビュー調査でも、中等部は高校入試等の行事があるため授業日数が少なく、特に1、2年生で授業のスピードを速めなければならないという説明(中学籍中

学校教員)を受けた。また、先取り学習をさせている学校では、早期に中学校の学習内容を終わらせなければならないという意識も教員に働いている可能性がある。逆に中等部に授業交流をしている高校教員は、高校受験を意識しなくてすむので、学習指導要領の範囲に限定せず、「いろいろ話ができる」(高校籍高校教諭)と語っていた。

**項目10** 中等部のきまりが守られないというように感じている中等部教員が多かったが、高等学校ではそのように感じる教員は少なかった。この原因としては、中高一貫校に多数ある、中等部にしか適用されないルールを意識していない高校教員が多いことが考えられる。ルールについての情報共有<sup>4</sup>をするとともに、中等部に対する指導をだれがどのようにしていくかを、協働して考えていく必要がある。インタビュー調査の中でも、開校初期におけるこうした状況の放置が、中等部と高等学校の分離につながり、中高一貫の推進を妨げた(高校籍高校教員)というエピソードが聞かれた。ちなみに、インタビューの一部から肯定的な回答が多いと推測された項目9「高校は、中等部があるため、一般の高校よりも生徒指導が厳しいように感じられる。」については多くの回答者が否定的な回答をしていた。中学に合わせて、高等学校の校則が厳しくなっていると感じている教員は1割程度にとどまった(4-3参照)。

#### 4-2.学校間格差が見られた項目

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
2 併設学校の同僚の授業を見て、自分には異校種の授業はできないと思うことがある。	中	5	9	7	5	19	35	27	19	2.54	54	46
	高	7	19	26	13	11	29	40	20	2.31	40	60
3 学力が重視される点で、一般の公立学校よりも、プレッシャーを感じることもある。	中	2	9	9	6	8	35	35	23	2.27	42	58
	高	5	17	33	10	8	26	51	15	2.26	34	66
5 教科書や教材の選定について、異校種の教員に相談することがある。	中	1	8	9	8	4	31	35	31	2.08	35	65
	高	6	16	26	17	9	25	40	26	2.17	34	66
6 授業内容や授業の進め方について、異校種籍の教員に相談にのってもらおうことがある。	中	5	10	6	5	19	38	23	19	2.58	58	42
	高	10	22	24	9	15	34	37	14	2.51	49	51

**項目2** 中学校教員による肯定的な回答の割合は、学校によってやや大きく異なる(中等部教員の肯定的な回答の割合が高い学校から、それぞれ中80%、高48%—中60%、高33%—中27%、高38%)。

**項目3** 高校教員において学校間の独立性がやや見られた(p値=0.07748)。大学入試模擬試験等ではかかる各学校の平均偏差値に比例する形で、プレッ

シャーを感じている高校教員の割合が高いことが明らかになった。

**項目5** 「教科書や教材の選定について、異校種の教員に相談することがある」という項目については、学校間の独立性が見られた(p値=0.0009367)。B校のみ、62%の高校教員が肯定的な回答をしている。他校の高校教員で肯定的な回答をした者がわずかであった

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

(14%、7%)ことを考えるとB校は特異である。

**項目6** 中高の教員ともに、約半数の教員が肯定的な回答をしていて、教科内での中高教員の協働がある程度進んでいることが明らかになった。

なお、項目5と項目6には相関(0.50)があり、項目6においてもB校のみ、中等部教員に相談する経験があると回答した高校教員の割合が大きかった。この学校は、中学校の教員が中心となって校内研修を

進めるという学校経営戦略をとっている学校である。この結果はそのような研修のあり方によって中学校教員の視点の有効性が、高校の教員にも理解されてきていることの表れだといえよう。この1校を例外として、中等部教員の方が、異校種教員に対してもより積極的に相談しているということがわかった。

## 4-3.肯定的な回答が少なかった項目

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
3 学力が重視される点で、一般の公立学校よりも、プレッシャーを感じることもある。	中	2	9	9	6	8	35	35	23	2.27	42	58
	高	5	17	33	10	8	26	51	15	2.26	34	66
4 6年間を通した人間教育が重視される点で、一般の公立学校よりも、プレッシャーを感じることもある。	中	1	8	10	7	4	31	38	27	2.12	35	65
	高	5	16	35	9	8	25	54	14	2.26	32	68
5 教科書や教材の選定について、異校種の教員に相談することがある。	中	1	8	9	8	4	31	35	31	2.08	35	65
	高	6	16	26	17	9	25	40	26	2.17	34	66
9 高校は、中等部があるため、一般の高校よりも生徒指導が厳しいように感じられる。	中	0	3	14	9	0	12	54	35	1.77	12	88
	高	0	10	31	24	0	15	48	37	1.78	15	85

「学力」(項目3)についても、「6年間を通した人間教育」(項目4)についても、プレッシャーを感じるかという設問に対し、肯定的な回答よりも否定的な回答の方が多かった。また、これらの項目と「戸惑い」(大問4の項目1)との間には弱い相関しかない(項目3:0.26、項目4:0.13)。中高一貫校における中高教員の「戸惑い」の要因は、学力の重視や6年間を通した人間教育といった学校目標として明文化できることにあることはそれほど多くはなく、人事交流の教員が異校種で感じる不安や困難・違和感(7章参照)に近いものである可能性や、中高一貫校独自の仕事加わり多忙化することにある可能性がある。

項目2・9に関しては前述の通りである。

## 5. 異校種教員からの学び

大問9は異校種教員からどのような学びがあるかを調査した項目である。なおこの項目では、採用時の籍に応じて教員を分けている。

## 5-1. 選択数

この項目では、あてはまるものを選択肢から3つまで選択することができるので、1つの回答で選ばれている選択肢の数が回答によって異なる。そこでまず、中学籍教員と高校籍教員とがそれぞれいくつ選

択していたかを図に示す。

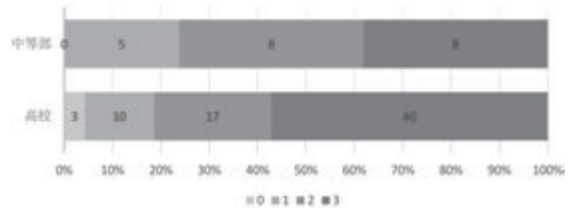


図5 異校種の教員から受けた「良い影響」の選択数

平均値は中学籍教員で2.1項目、高校籍教員で2.3項目であり、グラフからも高校籍教員の方がより多くの項目を選択していることがわかる。異校種の教員から学ぶことは、高校教員の方にとってやや多いようである。その他を選択して、自由記述する教員もいなかった。

この項目の選択数についても学校差があり、大問7の項目5「教科書や教材の選定について、異校種の教員に相談することがある」に対して肯定的な回答の割合が高かった学校では、高校教員の選択数が高かった(平均2.5項目)。前章4.2で説明したとおり、高校教員が中学校教員から学ぶことに、より意味を見いだしやすいとする研修体制が影響しているのではない。



## 5-2.内容

項目	中	高	割合
1 授業の技法	9	43	43%
2 発達段階に応じた生徒対応	5	49	31%
3 教科内容についての知識	14	23	29%
4 保護者対応の技法	2	28	10%
5 個に応じた生徒指導の技法	3	29	14%
6 研修に対する姿勢	9	18	26%
7 進路指導についての知識	3	18	15%

高校籍教員は、多い順に、発達段階に応じた生徒対応(70%)、授業の技法(64%)、つづいて個に応じた生徒指導の技法(29%)、研修に対する姿勢(26%)を選択していた。

インタビュー調査では、人事交流の一環で中学校に行った経験を持つ教員が、中学校でどのように生徒が育てられてくるのかを理解した経験がとても貴重だった、という旨のことを語っていた。この調査結果からも、異なる発達段階にある生徒を指導する高高校籍教員と中学籍教員とでは役割が異なるのだということを学ぶ経験が、高校籍教員に「良い影響」を与えているのだと考えられる。

「授業の技法」に関わっては、調査対象校のうち2校で授業研修が行われていて、アクティブラーニングの推進等に取り組もうとしていることが確認できている(1校は不明)。ただ、インタビュー調査では、すでに公立中学校において、かなりたくさんの研修を重ね、そうした授業の技法に習熟している中学校教員にとって、中高一貫校での授業研修は新鮮なものではないという見方(中学籍中学校教員)もあった。

「研修に対する姿勢」は、高校籍教員の26%に選択されたのに対して、中学籍教員には全く選択されなかった(0%)。この極端な差は、中学校教員と高校教員の集団意識によってもたらされている可能性がある。油布(2015)は小中学校の教員に比べ、高校教員が教員養成系大学ではなく、一般大学を経て採用されている割合が多いことが、「高校教師の職業アイデンティティが『教育』よりも『専門』教科にあることの基盤にもなっている」(p.68)とし、「多様化した高校教育」に対応しきれない原因の一つがそのアイデンティティであるのは間違いないと述べている。筆者の勤務経験によれば、学校内でのほぼ全ての研修が、「専門」教科についての研修ではなく、「教育」についての研修である。表13は、今回の回答者が免許を

取得した機関の内訳を示したものである。回答者の中学籍教員のうち、教員養成系大学で免許を取得した者の割合は、全国平均(平成28年度学校教員統計調査 中37.4%、高17.1%)やA県平均(平成25年度学校教員統計調査 中43.2%、高12.1%)に比べて顕著に高く、6割を超えていた。因果関係は即断できないが、こうした構成員の被教育経験が、中等部の教員の姿勢に影響し、高校教員に良い刺激を与えている可能性もある。

表13 本質問紙調査回答者の免許取得機関(%)

	教員養成系	非教員養成系	その他
高校籍	22.86	74.29	2.86
中学籍	61.90	38.10	0.00

「研修に対する姿勢」以外の項目では、中学籍教員は「教科内容についての知識」(67%)、「進路指導についての知識」(57%)、「授業の技法」(43%)を主に選択している。「教科内容についての知識」が多く選択されていることについては、油布の言う教職アイデンティティのみならず、協働する異校種の教員にも、高校教員から「専門」教科について有益な学びがあるという意識があることがわかる。インタビュー調査でも、高等学校の教員は教科指導の専門家であるとの中学籍教員の理解がうかがわれる場面が何度かあった。2番目に多く選択された「進路指導についての知識」というのは、おそらく大学進学に関する知識だと思われる。インタビュー調査でも、ある教員が、人事交流で中等部に来た高校籍の教員に対して最も期待することの1つとしてこれを挙げていた(中学籍中学校教員・教頭)。

## 6 望ましい中高一貫校の在り方

大問10~12では、教員が、望ましい中高一貫教育とはどのようなものだと考えているかを調査した。

## 6-1.中高一貫教育推進のための望ましい学校経営

大問10では、中高一貫教育を推進するにあたって望ましいと思われる学校経営の在り方を問う項目を、



公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

主にパイロットサーベイで聞かれた内容に基づいて設定した。中には逆転項目にしたものもある。それぞれの項目がどの程度回答者の思いと合致するかを4件法で選択するものである。回答の中央値と分散を見るために、箱ひげ図(図 6)を右に示す。

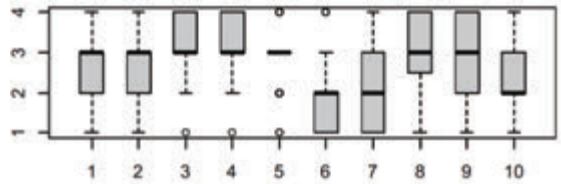


図 6 大問 10 における箱ひげ図

6-1-1. 肯定的な回答の多いもの

	回答	百分率								平均点	4と3の割合		2と1の割合	
		4	3	2	1	4	3	2	1					
3 高校の教員が中学生に関わることは中学生の学習意欲を高めることにつながる。	中	6	18	2	0	23	69	8	0	3.15	92	8		
	高	18	36	10	1	28	55	15	2	3.09	83	17		
4 中高それぞれで行われている生徒指導の内容は、全体で情報共有した方がよい。	中	14	10	1	1	54	38	4	4	3.42	92	8		
	高	31	31	3	0	48	48	5	0	3.43	95	5		
5 進路指導について、高校教員が積極的に中学生にも関わっていく必要がある。	中	5	16	4	1	19	62	15	4	2.96	81	19		
	高	15	34	15	1	23	52	23	2	2.97	75	25		
8 6年間を通して持ち上がって担当する教員が各学年にいるのが望ましい。	中	11	7	7	1	42	27	27	4	3.08	69	31		
	高	24	26	13	2	37	40	20	3	3.11	77	23		
9 中等部への人事交流は併設高等学校からの方が望ましい。	中	6	10	8	2	23	38	31	8	2.77	62	38		
	高	18	24	20	3	28	37	31	5	2.88	65	35		

項目 3・4・5 の内容には多くの回答者が同意した。特に項目 5 の内容が支持されたことは、大問 9 の項目 7 で、高等学校の教員から学ぶものとして「進路指導の知識」が多く選択されたこととも関連がありそうである。項目 3 に関連して言うと、B 校は、土曜学習(PTA 主催)の時間を活用し、中学 3 年生向けの「スーパーセミナー」(希望者に対し、知的好奇心を刺激することを目的として、国数英の教員が各々工夫した授業を行っている)という特別授業を定期的実施している。C 校でも、中学生のための体験授業を年数回行われている。自由記述によれば、D 校でも「高校教員による中等部生への特殊講義などの実施(実施中)」がなされているとのことであったから、すべての調査対象校で、中学生の学習意欲を高めることを目的とし、高校教員が正規の授業とは別に特別な取り組みをしているようである。

項目 8・9 の内容に対してはやや賛否が分かれた。項目 8 に対しては、現在高等学校との人事交流を行っている学校の中学籍中学校教員のみ間で賛否が拮抗しており、これは高等学校まで担当が持ち上がっていくことに不安を抱く者が多いということなのかもしれない。その他の学校・校種の教員には支持す

る者が多かった。インタビュー調査では次のような声が聞かれていた。

中学校で 3 年間やった先生が、そのまま高校に上がってくださるっていうのはすごくいいなと私は思います。6 年間通して子どもたちの様子をきちんと見てくださっている先生がいるっていうのは、生徒たちにとっても、すごくいいことだと思ってます。何か生徒指導上の問題があったときに家庭環境のこともよくご存知ですし、中学校での様子もよくわかってくださっているの、なんかすごく安心するっていうんでしょうかね、子どももそれは同じなんじゃないかなと思うんです。知ってる先生が見てくれるっていうのは、それはほんとに中高一貫って、すごくいいことだなと思います。(中学籍中学校教員)

項目 9 への賛否は、すでに併設高等学校以外の高校との人事交流を行っている学校で拮抗している。この結果は、併設高等学校から来ているわけでもなくとも、その高校籍教員の特性を活かした教育活動を行っている中等部教員がいることを示唆している。

6-1-2.肯定的な回答と否定的な回答の伯仲したもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高の教育内容の重複を避けることで、効率のよい教科教育ができる。	中	4	13	8	1	15	50	31	4	2.77	65	35
	高	6	27	29	3	9	42	45	5	2.55	51	49
2 中学校の教科指導は必ずしも大学入試につながらなくてもよい。	中	3	9	11	3	12	35	42	12	2.46	46	54
	高	7	27	23	8	11	42	35	12	2.51	52	48
10 中高一貫校においても、中学校と、高校では教育の目的が異なるので、無理に教育目標をそろえない方がよい。	中	4	10	6	6	15	38	23	23	2.46	54	46
	高	6	23	23	13	9	35	35	20	2.34	45	55

肯定的な回答と否定的な回答が伯仲した項目は、中高の教育課程に関わる項目という点で共通性を持っている。項目2と項目10の間にはやや強い相関(0.51)が見られる。中学の教育内容と高校教育内容との連続性に積極的な意味を見いだす教員と、中学校教育と高等学校教育とでは取り込まれるべき課題が異なると考える教員の両方が一定数いるようである。項目1については、中等部教員のみを学校間比較すると、やや独立性がある(フィッシャーの直接確率検定  $p$  値 = 0.07657)。この項目に対する回答は、高等学校で外部から入学する生徒の割合が少ない学校ほど肯定的だった(

表14、学校名右の百分率が高等学校に外部から入学してくる生徒の割合)。中高一貫校であるとはいえ、外部からの高校入学者が多い学校で、中学と高校とで学習内容が重複することを避け中等部で先取り学

習を進めることには効率性がない、と考えられていてもおかしくはない。併設型中高一貫校だからこそ直面する難しい問題だと言えよう<sup>5</sup>。

なお、人事交流の一環で現在中等部に勤務している高校籍の教員は、その全員がこの項目に肯定的な回答をしていた。

表14 項目1における中学校教員の回答の学校間比較

回答	B校(50%)	C校(0%)	D校(33%)
4	20%	18%	0%
3	20%	64%	80%
2	60%	9%	20%
1	0%	9%	0%

6-1-3.否定的な回答のもの

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
6 中等部は中学校籍の先生だけが担当することが望ましい。	中	2	3	12	9	8	12	46	35	1.92	19	81
	高	3	10	30	22	5	15	46	34	1.91	20	80
7 高校は高校籍の先生だけが担当することが望ましい。	中	4	7	10	5	15	27	38	19	2.38	42	58
	高	3	16	27	19	5	25	42	29	2.05	29	71

項目6、7の内容は中高の教員の人事交流や授業交流についてのものである。これらの項目の回答の間には強い相関(0.7)があった。両方に肯定的な回答をした者は17人(19%)で、項目6に肯定的な回答をした者は、1人を除き項目7にも肯定的な回答をした。項目7には肯定的、項目6には否定的な回答をした教員は13人であった。若干だが、項目7に肯定的な回答をした者の割合は、中等部教員の方が高かった。

しかし先取りして言うと、大問12(後節6-3参照)では「人事交流」も「授業交流」も効果的だと考える教員が多いことが知られた。項目7と大問12の「授業交流」の項目との間に負の相関(-0.52)が見られることから、項目7は中等部の教員にとって高等学校の

授業を担当することが負担となっていることを示している可能性がある。インタビュー調査でも、中等部の教員がなかなか高等学校の授業を持ちたがらないという話を聞いた。ただ、(本節で扱っている)項目7と大問7の項目2「異校種の授業はできない」との間にはほとんど相関が見られなかった(0.06)ことを踏まえると、中等教員が高等学校の授業を担当しながらないのは、授業スキルに不安を感じるからではなく、多忙化<sup>6</sup>や、高等学校で受ける結果主義的な評価を避けたいがためだとも考えられる<sup>7</sup>。

項目6に肯定的な回答をする教員には中高の人事交流や授業交流を経験した教員が多く(14/18名)、身をもって中高交流人事や授業交流の苦勞を感じて

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

いるのがわかる。

## 6-2.中高一貫教育で大切にしたいこと

大問 11 は、大問 2 の項目と同じ項目を用いつつ、教員自身の気持ちを問う設問である。これにより、

所属する学校において大切にされていることと教員が個人として大切にしたいこととの差異があるかどうかを調査した。5 項目および自由記述から 2 項目を選択させる設問である。結果を

表 15 に示す。

表 15 中高一貫校で大切にしたいこと(所属する学校の現状と回答者の気持ちの差異)

		学校の様子		回答者の気持ち			差
		回答数	回答数/回答総数	回答数	回答数/回答総数		
1 高校入試の影響を受けずゆとりある安定した生活を送れること	中	9	35%	4	15%		-19%
	高	20	31%	6	9%		-22%
2 継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること	中	13	50%	16	62%		12%
	高	32	49%	48	74%		25%
3 継続した指導によって効果的な教育を可能にし、大学進学の実績をより伸ばすこと	中	9	35%	7	27%		-8%
	高	29	45%	33	51%		6%
4 異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること	中	12	46%	17	65%		19%
	高	27	42%	29	45%		3%
5 中等部で安定した人間関係づくりをすすめ、生徒の高校入学時の精神的負担を減らすこと	中	4	15%	3	12%		-4%
	高	11	17%	1	2%		-15%
その他:	中	中部活動の継続した指導					
	高	中高職員による連携会					

## ・選択する教員の割合が増加した項目

2. 継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること
4. 異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること

## ・選択する教員の割合が減少した項目

1. 高校入試の影響を受けずゆとりある安定した生活を送れること
5. 中等部で安定した人間関係づくりをすすめ、生徒の高校入学時の精神的負担を減らすこと

## ・中等部教員の割合が減少し、高校教員の割合が増加した項目

3. 継続した指導によって効果的な教育を可能にし、大学進学の実績をより伸ばすこと

所属する学校の現状では他の項目とわずかな差だった〈ゆとり〉は、実際の中高の教員の気持ちとしてはあまり大切にされていないことがわかった。中等部教員には〈進学実績〉よりも〈個性・才能の伸張〉や〈異年齢集団の活動による社会性の育成等〉が優先されるようである。インタビュー調査でも、中学の教員は人格陶冶を教育の中心に据えているという話(高校籍高校教員・公立中学校経験あり)を聞いた。

中等部の教員と同じく高等学校の教員にも、〈個

性・才能の伸張〉が最も多く選択された。(異年齢集団の活動による社会性の育成等)を選択する者の割合は〈進学実績〉のそれとほぼ同等であると言ってもらおう。

〈進学実績〉への回答は中等部教員と高校教員とで逆の傾向を示したが、他の項目に比べその増減はそれほど大きくない。中高一貫校教員が、中学入試を経て子どもを入学させた保護者から進学実績を求められるのは自然なことであり、そのことを教員も受け入れているのだろう。大学入試を間近に控えた生徒を指導する高校教員には特に、その期待に添いたいという思いがあるのだと思われる。

この回答結果に基づいて筆者が主張するのは、中等部教員と高等学校教員とが教育ビジョンを共有するのは十分に可能だということである。確かにインタビュー調査では、中学校教員と高等学校教員はそれぞれ「過程重視」、「出口重視」というかなり異なった授業観をもつのではないかと(中学籍中学校教員)とも言われていたのだが、量的な観点からは、特に項目 2、項目 4 は中等部教員と高等学校教員の双方に十分支持される理念であると言えるはずである。この理念を軸として教育内容を創成し、中等部教員と高等学校教員との協働を進めることで、より効果的な中高一貫教育が実現するのではないかとと思われる。



## 6-3.効果的な中高一貫校の取り組み

12. 中高一貫校の取り組みとして次のものはどれくらい効果的だと思いますか。

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高6年を見通したシラバス作り	中	10	12	3	1	38	46	12	4	3.19	85	15
	高	19	36	8	2	29	55	12	3	3.11	85	15
2 一体となった校務分掌の活動	中	6	14	6	0	23	54	23	0	3.00	77	23
	高	13	43	7	2	20	66	11	3	3.03	86	14
3 部活動における中高一体の運営	中	7	16	3	0	27	62	12	0	3.15	88	12
	高	27	33	4	1	42	51	6	2	3.32	92	8
4 人事交流（中高間での人事異動を伴うもの）	中	7	14	4	1	27	54	15	4	3.04	81	19
	高	19	36	8	2	29	55	12	3	3.11	85	15
5 授業交流（人事異動を伴わないもの、ITも含む）	中	6	17	2	1	23	65	8	4	3.08	88	12
	高	28	28	7	2	43	43	11	3	3.26	86	14
6 生徒同士の異学年交流	中	15	10	0	1	58	38	0	4	3.50	96	4
	高	30	33	2	0	46	51	3	0	3.43	97	3

大問12の項目は、インタビュー調査の中で、中高一貫校での効果的な取り組みとして挙げられたものを基に作成されている。量的な調査の結果、これらの取り組みは多くの教員に肯定的に理解されており、インタビュー調査で聞かれた意見が多くの教員の声を代表するものであることが確かめられた。

**項目6** そのなかで最も支持を集めたのが「生徒同士の異学年交流」であった。「中高の教員が協働して取り組めるもの」、「取り組んでみたいもの」を問うた自由記述でも、これに関連する活動が多く挙げられた。表現は異なるが同様の記述が他にも複数見られたものにはアスタリスク(\*)を付した。

*行事などでの異学年交流(高校教員)\**

*学校行事の共同開催(中等部教員)\**

中学生対象に、高校生または高校の教員が現在のB校の姿・実績を説明して、高校に上がるとこんな風になれるんだ、なりたいな、と思わせる話をする。

(高校教員)

*高校生と中等部生によるグループ学習(高校教員)\**

高校生が中学生に勉強を教える機会を増やすこと。

(中等部教員)\*

総合学習の中に、高校生がリーダーとなってテーマごとに中学生を指導していくプロジェクトを取り入れること。(高校教員)

インタビューでも、異学年交流は、中学生のみ、高校生のみで活動する場合よりも、生徒間の成長度合いの差が大きく、高校生は中学生にとって数年後の自分の姿を重ねる憧れの存在になりうるし、中学生は高校生にとって自分が学習を教えられる相手であるという点で、中高一貫校の中だからこそ得られる

体験を生徒に提供するものだという評価が聞かれた。今回の調査は、各学校で行われている異校種間での様々な交流をさらに推進していくことが多くの教員に望まれているという事実を明らかにしたのだと言える。ただし、異校種・異学年交流の実現は、学年主任等の職位にある教員同士が日頃から意思疎通を重ねていないと難しいというのも事実であるため、彼らの日常的な意思疎通・情報交換を可能にする学校経営を展開することも重要である。

**項目3** 「中高6年を見通したシラバスづくり」も支持する者の多い取り組みであった。自由記述欄では以下のような取り組みが挙げられていた。(\*は全項目と同様)

*シラバスの作成。授業内容の検討。(高校教員)\**

*6年間を見通したシラバス作り(教科、進路など)(中等部教員)\**

*6年間を見通した授業づくりや行事づくり(中等部教員)*

*一貫生については6年間、継続した指導(生徒指導や進路指導)ができること。(中等部教員)*

ここでは、教科指導だけでなく、進路指導や行事にまで言及されている点が注目される。大問10の「中高の教育内容の重複を避けることで、効率のよい教科教育ができる」という項目には賛否が分かれたことを踏まえると、本設問での回答結果は、シラバスづくりの工夫が「効率のよい教科教育」とは別のことの実現につながる多くの教員が感じていることを示唆しているのではないかとと思われる。また、自由記述欄で得た記述は、教科教育のシラバス作りのみならず、進路指導や生活指導のシラバスづくりを通してでも、



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

中等部教員と高等学校教員との協働が可能だと考える教員が存在することを示している。

項目 2 中等部の教員が大きく戸惑うところなのではないかと思われる校務分掌の組織体制に対しても、(他の項目に比べ若干中学校教員の肯定的な回答が少ないとはいえ、)一体的に取り組むことが「効果的」だとは多くの教員が感じているようである。

留意しなければならないのは、項目 6 以外の項目

について、それを支持しない者も 1 割以上いるということである。相関係数を調べたところ、大問 12 のほとんどいずれの項目についても、それを支持する度合いと、大問 10 での項目 6・7(「中等部は中学籍の教員が、高等学校は高校籍の教員が教えた方が望ましい」)を支持する度合いとの間に弱い逆相関が見られ(-0.2)、特に大問 10 の項目 7 と大問 12 の項目 5 との間には前述の通り強い逆相関(-0.52)が見られた。

## 7. 人事交流の経験

14. (人事交流経験者のみ)次の項目について、交流中の先生御自身のお気持ちにどれくらいあてはまるか、最も近い選択肢をお選びください。

		4 あてはまる, 3 まああてはまる				回答				百分率	平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1				
1 教科指導に不安と困難を感じる。	中	1	2	0	2	20	40	0	40	2.40	60	40	
	高	4	12	4	3	17	52	17	13	2.74	70	30	
2 異校種の「やり方」に慣れるのに精一杯である。	中	1	2	1	1	20	40	20	20	2.60	60	40	
	高	7	7	8	1	30	30	35	4	2.87	61	39	
3 生徒の発達段階に応じた指導に困難を感じる。	中	0	3	1	1	0	60	20	20	2.40	60	40	
	高	6	12	5	0	26	52	22	0	3.04	78	22	
4 校務の分掌(分掌など)の考え方が異なり、苦勞をしている。	中	0	3	1	1	0	60	20	20	2.40	60	40	
	高	4	10	9	0	17	43	39	0	2.78	61	39	
5 周りの先生に迷惑をかけているのではないかとという不安がある。	中	0	1	4	0	0	20	80	0	2.20	20	80	
	高	2	12	6	3	9	52	26	13	2.57	61	39	
6 異校種籍の先生との授業観の違いに戸惑いを感じる。	中	1	1	2	1	20	20	40	20	2.40	40	60	
	高	7	9	7	0	30	39	30	0	3.00	70	30	
7 授業について、これまでの教員経験を積極的に活かす工夫をしている。	中	1	3	0	1	20	60	0	20	2.80	80	20	
	高	10	10	2	1	43	43	9	4	3.26	87	13	
8 同僚に対し、これまでの教員経験を積極的に活かした提案ができています。	中	0	3	1	1	0	60	20	20	2.40	60	40	
	高	6	9	6	2	26	39	26	9	2.83	65	35	
9 同僚からの十分なサポートがされていると感じる。	中	1	3	0	1	20	60	0	20	2.80	80	20	
	高	9	12	1	1	39	52	4	4	3.26	91	9	

この大問では、採用時の籍に応じて教員が分けられている。

項目 1、7 の回答結果からは、人事交流の取組においては、半数以上の教員が教科指導に不安と困難を感じている一方で、ほとんどの教員がこれまでの授業経験を生かして授業をすることができていることが分かる。一方で項目 4、5 の回答結果は、校務の面では、分掌などに対する考え方の違いに苦勞する教員や、周りに迷惑をかけているのではと不安を感じる教員が一定数いることを示している。項目 8 の回答結果からは、多くの教員が、異校種の同僚に対する提案をする場面でこれまでの教員経験を活かしているが、それは授業で工夫を試みる場面ほどにはないことが分かる。項目 9 の内容には肯定的な回答が多く、精神的には余裕がないものの、同僚からのサポートは厚いので何とかやっている、という教員の様子がここにかがわれよう。

項目 3 の回答結果からは、「発達段階に応じた指導

に苦勞する教員が多いことが知られる。「発達段階に応じる」のに教員が苦勞するのは、主に生徒指導の場面においてなのではないかと思われる。インタビューで、生徒指導に当たった失敗談も聞かれていた(中学籍高校教員、高校籍高校教員)からである。

この大問で特に注目したいのは、項目 6「授業観の違い」への回答である。「授業観」については、インタビュー調査では、中学校へ人事異動経験のある教員から、高校教員は教科内容をどう教えるかを考えて授業づくりをし、中学校教員は生徒をどう動かすかを考えて授業づくりをしているのに気づく経験(高校籍中学校教員)や、中学校の授業研修は点数を上げるためではなく「豊かな授業」をめざして、高校教員とのメンタリティの違いを感じた経験(高校籍高校教員公立中学校勤務経験あり)が語られていた。この回答結果は多くの人事交流経験者が同様の経験をしたことがあることを示している。また、中学籍教員と高校籍教員との間で、授業観の違いに戸

惑いを抱く度合いに差が生じている。中学籍の人事交流経験者は5人と少ないので、厳密な比較はもちろんできない。しかし、あえて言えば、授業観の違いに対し戸惑いを抱く度合いに両者の間で差が生じるのは、高校では、自分の高校生時代の経験から人事交流者が想像する授業と現在実際に行われている授業の様子とが大きくは異なるのに対し、中学校では、学習指導要領が改訂され、新たな授業観が提示される度に研修が行われ、新たな授業観を意欲的に取り入れようとする姿勢があるため(5章参照)に、中学生時代の経験から想像される授業の様子と実際に現在行われている授業の様子とが大きく異なるからではないだろうか。

## 8. 本研究のまとめ

第2章では、所属校の現状に対する教員の意識を調査した大問1~3の結果を報告した。回答が同傾向にある項目と、得点の分散が大きい項目とがあり、後者のうち、学校別得点の独立性が高い項目の結果に、各学校の経営の特色が表れていると考えられる。このような項目には、中高6年間を見通した進路指導、併設学校の授業見学、プロジェクトチームでの異校種教員との協働、目指すべき学校像の共有、教育活動への新しい理論・方法の積極的な取り入れ等がある。また、いくつかの項目の結果は、インタビュー調査で学校全体での取り組みについて教員から語られた内容とも対応していた。加えて改善提案の発信者についても、インタビュー調査での取り組みと関連がみられた。得点の分散が大きいものの、学校間での独立性があまりみられない項目には、学校内での教員の置かれた状況や、所属する学年・教科・分掌組織などによって、意識差が生まれている可能性もある。

回答の分散が小さく、否定的だった項目の内容は、A県における併設型中高一貫校が抱える困難な課題であると考えられる。例えば「高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい」という項目である。高校教育に対する中学校教員の理解を促進することで、中高一貫校としてのより効果的な教育活動が見込まれるが、今回の調査対象校のいずれでも、その方策は立てあぐねているようである。

また、項目を因子分析によって分類し、「境界横断文化」「カリキュラム」「情報共有」を中高一貫教育の推進のための3要素と仮定した。この3要素を重視することで、中高の教員の協働を促進する学校経営がどの程度実現できているかを判断することが可能になるかもしれない。例えば、調査の対象としたどの学校にとっても、異校種の「教育内容の決定過程」が見えにくいことが課題だったが、これは「情報共有」がいまだ不十分であることを示している。策定された6年間の「カリキュラム」の実効性をより高めるために、「情報共有」の推進に重点を置くなどが考えられる。

第3章では、協働に関わる中高教員の意識を分析した。A県における併設型中高一貫校における教員の「戸惑い」は、勤務年数に関わりなく見られることがわかった。特に中学校教員で「戸惑い」を感じる教員が多く、その要因については、第4章での大問7の項目との分析とも合わせて考えると、併設型中高一貫校の組織構造が、一般の公立中学校と大きく異なることにある可能性を指摘した。

また、併設学校と積極的に関わりをもてる、いわば境界横断を積極的に行える教員は全体の約半数程度であり、中高一貫校という大きな枠組みで「学校改善意欲」を持っている教員の割合はそれほど大きくないことが明らかになった。しかし、他項目との相関関係を分析した結果から、境界横断的な取り組みを推進することのできる教員の育成のためには、「授業見学の機会」や「併設学校の生徒との関わる機会」を用意することが効果的なのではないかという示唆を得た。

そのほか、異校種教員同士の関わりは、教科・分掌組織・部活動で活動を共にすることによってだけでなく、併設学校で単独授業をする経験によっても、生徒との交流を経由して生まれるのだということが明らかになった。インフォーマルな関わり方の創出には、職員室の座席の配置や懇親会の利用という要素も一定の役割を果たしていることも分かった。

加えて、異校種の教育活動を知るきっかけとなるものには、「同僚との会話」や「会議や打合せ」が主ではあるが、「生徒との会話」や「研修」など多様なきっかけがあることがわかった。

## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

そして、授業以外で併設学校の生徒との会話を持つ頻度が、中高合同の部活動を担当している教員の間で高いということを示し、担当する部の部員の学年構成が、異校種の教育活動の理解を深める機会が得られる頻度に影響する可能性があることを示唆した。

第4章では指導に関わる中高教員の意識を分析した。中高の教員の意識差が出た項目として、生徒の「学力差」と中等部での「ゆとり」「生活指導」が挙げられる。中学校教員にとっては、それほど困難があると感じられない生徒の「学力差」のために、高校教員の多くが授業に困難を感じていた。中等部での「ゆとり」についても、高校教員が思っているほど、中学教員はゆとりを感じていない。中等部での生活指導についても、中高教員の意識差が大きい。高校教員が中等部の「生活のきまり」に関心を持つ必要性が示唆された。

学力や6年間の一貫教育という点では、それほどプレッシャーを感じている教員はそれほど多くなく、学力へのプレッシャーが中等部教員で比較的高い(42%)ものの、その他の項目は3割程度にとどまっている。

授業内容や授業の進め方についての、異校種教員への相談については、半数程度の教員が経験し、中高の境界横断が進められていることが確認できた。学校によっては、教科書や教材選定にまで相談内容が広がっている様子が確認できた。

第5章では、異校種教員からどのような学びがあると考えているかを調査した。高校教員は「発達段階に応じた生徒対応」「授業の技法」、中学校教員は「教科内容についての知識」「進路指導の知識」を主なものとしてあげていた。この結果から、中高の教員がそれぞれの校種で勤務するなかで蓄積してきた知識・技能が異なり、それを目の当たりにすることが異校種の教員の有益な学びになっていることが、明らかになった。すなわち、中学校教員は生徒理解をベースとした知識・技能が豊富であり、高校教員は各教科の内容や、大学進学に関する知識が豊富だということである。また、異校種教員の「研修に対する姿勢」からの学びの有無には中高の教員間の差があり、この背景としては、中学校籍教員に教員養成系大学出身

が多数を占めることと関わっている可能性も指摘した。

第6章では、望ましい中高一貫の在り方について意識調査をした。高校教員が併設学校に関わることについてはきわめて多くの教員が肯定的な回答をし、生徒指導の内容の共有についても多くの教員が肯定的な回答をしている。一方で、カリキュラムの再構築に関わる「中高の教育内容の重複を避けることで、効率の良い教科教育ができる」(大問10の項目1)や「教育目標」の共通化については、肯定的な回答と否定的な回答が伯仲している。特に、項目1については、併設中学校以外からの高等学校入学予定者が多い学校ほど、否定的な回答になり、中等教育学校とは異なる併設型中高一貫校の難しさを示す結果となった。ただ、「6年間を見通したシラバスづくり」については85%の教員が肯定的だったことを考えると、多くの教員が、効率性とは別に、一貫したカリキュラムづくりには意義を認めているといえる。

「中高一貫で大切にしたいこと」については、所属する中高一貫校の現状と、自身の思いとの差がみられた。「ゆとり」については中高の教員ともに、優先順位が低くなり、代わって選択されたのは「継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること」「異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること」である。大学進学を目的とする教科教育でのカリキュラムの一貫性だけではなく、本当はこうした個性や豊かな人間性の伸張を中高一貫教育では大切にしたいという教員の思いがわかる結果になった。

第7章では人事交流中の教員の思いについて調査した。異校種の「やり方」や「授業観」についてのさまざまな葛藤を、質問紙調査によって確認することができた。中高一貫校でない公立高校・中学校では人事交流の受け入れは概ね0人か1人であるのに対し、中高一貫校は多くの人事交流・授業交流の教員を抱えることになる。学年主任や教科主任等のミドルリーダーは、中高の領域横断をする人事交流中の教員が、併設中学校や併設高等学校の教育活動を活性化できるよう、意識的に配慮する必要がある。そのためこの知見として、本章は活用できよう。



## 註

<sup>1</sup>分析にはR version 3.4.2のfisher.test()関数を用いた。

<sup>2</sup>分析にはR 3.4.2のcor関数を用いた。以下同様。

<sup>3</sup>分析にはR version 3.4.2のfactanal()関数を用いた。

<sup>4</sup>数年前までB高校では、生活のきまりや、長期休暇中のルールについて、中高全体の職員会議では、高等学校のものしか提示がされず、中等部のもは中等部会議でのみ提示されていた。その場合、高校教員は高校生と同じルールでしか中等部生の指導はできない。

<sup>5</sup>インタビュー調査によると、C校では開校当初の構想では、中等部の2クラスがそのまま併設高等学校に持ち上がっていく予定だったが、諸事情により4年目から高等学校から入学する生徒たちとの混合クラスにしたのだという。そのことによって「いわゆる先取りをすとか、一貫ならではの一貫生[筆者注：中高一貫校に在籍している生徒のこと]としての、中3でだから高校の範囲をどんどんやってしまうような、一貫の進学校の、首都圏のそういう部分はできず、っていう難しさ(中学籍中学校教員)があるという。

<sup>6</sup>「本当に中学の先生忙しいじゃないですか。だから、そこの負担なんですよね。」(高校籍高校教員へのインタビュー調査より)

<sup>7</sup>「さっき言ったその点数がねっていうのは(=中等部から併設高等学校へ授業交流に行った先生が模試の点数で批判されたこと)、それ(=生徒を動かす授業手法)がじゃあ結果にね、どう結びつくかっていうところにギャップがそこは出ちゃったと思う。授業自体はね、絶対いい授業だったと思うんです。[……]中等部の授業を見ている限りはとて素晴らしい内容だったので、それとじゃあ点数に結びつく部分との、なんだろう、押さえのギャップっていう部分だったと思うんですけれどね。[……]だけど、本当に中学の先生忙しいじゃないですか。だから、そこの負担なんですよね、結局。」(高校籍高校教員へのインタビュー調査より)

## 参考文献

赤岩俊明(2017)「中等教育学校教師の教職アイデンティティの揺らぎと熟達」, 修士論文, 東京大学大学院教育学研究科。

石田真理子(2011)「教育リーダーシップにおける「同僚性」の理論とその実践的意義」, 『東北大学大学院教育学研究科研究年報』, 第60巻, 第1号, 419-436頁。

国立教育政策研究所(2016)『中高一貫教育の現状と制度化の政策過程に関する調査研究』, 平成27年度プロジェクト研究報告書 初等中等教育の学校体系に関する研究報告書, 第3号, 国立教育政策研究所。

小林英治(2013)「中高一貫校における校種・分掌の枠を超えた校内研究体制の構築」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報』, 第4号, 272-275頁。

一(2014)「中高一貫校に向けた校内研究体制の構築」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報』, 第5号, 178-185頁。

志水宏吉(2002)『学校文化の比較社会学: 日本とイギリスの中等教育』, 東京大学出版会。

高田明知(2000)「中学校と高等学校の連携に関する研究」, 修士論文, 兵庫教育大学大学院学校教育研究科。

田原尚人(2017)「中高一貫校における教師の成長・発達プロセスに関する考察: 教師による指導経験の意味づけに着目して(特集教育行政・経営研究における中等教育の位置)」, 『教育経営学研究紀要』, 第19号, 87-94頁。

露口健司(2006)「学校ビジョン」, 篠原清昭(編)『スクールマネジメント- 新しい学校経営の方法と実践』, ミネルヴァ書房, 75-90頁。

一(2008)『学校組織のリーダーシップ』, 大学教育出版。

淵上克義・西村一生(2004)「教師の協働的効力感に関する実証的研究」, 『教師学研究』, 第5巻。

淵上克義(2005)『学校組織の心理学』, 日本文化科学社。

油布佐和子(2015)「高校の多様化と教師」, 『現代日本の教師: 仕事と役割』, 放送大学教育振興会, 66-87頁。

油布佐和子・六島優子(2006)「中高一貫教育の現状と課題」, 『福岡教育大学紀要第4分冊教職科編』, 第55号, 101-118頁。



公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

参考資料

中高一貫に関する調査 集計結果

全体

回答数 中26名 高65名 計91名  
2018/1/12

1. 御校の御様子をうかがいます。次の項目について、先生御自身のお気持ちに最も近いものをお選びください。

		回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
		4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高6年間を見通した進路指導がされていると感じる。	中	2	15	9	0	8	58	35	0	2.73	65	35
	高	8	31	22	4	12	48	34	6	2.66	60	40
2 生徒の望ましい成長のために、発達段階に応じた行事が十分に用意されている。	中	5	13	7	1	19	50	27	4	2.85	69	31
	高	12	44	9	0	18	68	14	0	3.05	86	14
3 他校と比較して、廊下や教室等の掲示物に工夫がされている。	中	4	12	9	1	15	46	35	4	2.73	62	38
	高	17	31	16	1	26	48	25	2	2.98	74	26
4 併設学校の同僚の授業を見る機会がよくある。	中	3	14	7	2	12	54	27	8	2.69	65	35
	高	23	22	16	4	35	34	25	6	2.98	69	31
5 中高の教育内容の連携が十分できていると感じる。	中	2	6	18	0	8	23	69	0	2.38	31	69
	高	3	28	31	3	5	43	48	5	2.48	48	52
6 高校教員の教科指導は受験学力の向上を重視している。	中	11	15	0	0	42	58	0	0	3.42	100	0
	高	29	32	3	1	45	49	5	2	3.37	94	6
7 分掌や学年の枠を超えた改善案を出しやすい雰囲気がある。	中	2	7	14	3	8	27	54	12	2.31	35	65
	高	12	21	27	5	18	32	42	8	2.62	51	49
8 教員の個性や多様性を積極的に評価し、個々の持ち味を伸ばそうとする雰囲気がある。	中	3	20	3	0	12	77	12	0	3.00	88	12
	高	8	39	17	1	12	60	26	2	2.83	72	28
9 併設学校の教員と一緒にプロジェクトチームを組むことがある。	中	4	15	3	4	15	58	12	15	2.73	73	27
	高	22	21	16	6	34	32	25	9	2.91	66	34
10 6年間を通した教育実践の成果を定期的にふり返り、下の学年への指導につなげている。	中	3	9	11	3	12	35	42	12	2.46	46	54
	高	2	27	27	9	3	42	42	14	2.34	45	55
11 中等部の教員の意見が全体に反映されている。	中	0	11	12	3	0	42	46	12	2.31	42	58
	高	3	25	32	5	5	38	49	8	2.40	43	57
12 中高教員で、目指すべき学校像が共有されている。	中	3	7	12	4	12	27	46	15	2.35	38	62
	高	4	31	22	8	6	48	34	12	2.48	54	46
13 中等部の教育内容の決定過程は、高校の教員に見えやすい。	中	2	7	12	5	8	27	46	19	2.23	35	65
	高	1	15	37	12	2	23	57	18	2.08	25	75
14 高校の教育内容の決定過程は、中等部の教員に見えやすい。	中	1	6	14	5	4	23	54	19	2.12	27	73
	高	1	14	39	11	2	22	60	17	2.08	23	77
15 新しく赴任してきた教員が中高一貫について理解を深める機会が十分に用意されている。	中	1	8	12	5	4	31	46	19	2.19	35	65
	高	3	18	37	7	5	28	57	11	2.26	32	68
16 学習指導や学級経営についての新しい理論や方法を積極的に取り入れていこうとする雰囲気がある。	中	6	9	11	0	23	35	42	0	2.81	58	42
	高	14	35	13	3	22	54	20	5	2.92	75	25
17 中学校と高等学校は学校組織として一体感をもって教育活動に当たっている。	中	2	11	12	1	8	42	46	4	2.54	50	50
	高	9	32	19	5	14	49	29	8	2.69	63	37
18 中等部出身の高校生と接して、中等部での特色ある教育の成果を感じることがある。	中	3	18	4	1	12	69	15	4	2.88	81	19
	高	16	40	7	2	25	62	11	3	3.08	86	14

2. 御校が中高一貫校として大切にしていると思われるものは何だと感じますか。2つまでお選びください。

		回答数	回答数/回答総数
1 高校入試の影響を受けずゆとりある安定した生活を送れること	中	9	35%
	高	20	31%
2 継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること	中	13	50%
	高	32	49%
3 継続した指導によって効果的な教育を可能にし、大学進学の実績をより伸ばすこと	中	9	35%
	高	29	45%
4 異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること	中	12	46%
	高	27	42%
5 中等部で安定した人間関係づくりをすすめ、生徒の高校入学時の精神的負担を減らすこと	中	4	15%
	高	11	17%
その他:			
	中	活動の継続した指導。	
	高	中高職員による連携会議。	

3. 御校では教育活動の改善提案はどなたから出されることが多いと感じますか。

		回答(選択された順位)					平均順位
		1	2	3	4	5	
1 管理職(校長・副校長・教頭)	中	12	4	4	4	2	2.2
	高	36	12	8	6	3	1.9
2 分掌の主任(研修主任をのぞく)	中	5	10	5	3	3	2.6
	高	11	27	11	14	2	2.5
3 研修主任	中	3	6	10	5	2	2.9
	高	11	13	24	12	5	2.8
4 学年主任	中	2	5	7	10	2	3.2
	高	4	8	19	28	6	3.4
5 上記主任ではない教諭	中	4	1	0	4	17	4.1
	高	3	5	3	5	49	4.4

4. 中高一貫校で教育活動に当たられる中で、次の項目について、先生御自身のお気持ちに最も近い選択肢をお選びください。

		回答			百分率			平均点	4と3の割合		2と1の割合		
		4	3	2	1	4	3		2	1			
2	分掌会議では疑問に思うことや正しいと思うことは積極的に発言し、共通理解に向け努力することができる。	中	3	15	7	1	12	58	27	4	2.77	69	31
		高	15	30	16	4	23	46	25	6	2.86	69	31
3	学年会議では疑問に思うことや正しいと思うことは積極的に発言し、共通理解に向け努力することができる。	中	16	9	1	0	62	35	4	0	3.58	96	4
		高	19	38	6	2	29	58	9	3	3.14	88	12
4	併設学校の同僚と仕事上の色々な話をするところがある。	中	8	13	5	0	31	50	19	0	3.12	81	19
		高	15	34	13	3	23	52	20	5	2.94	75	25
5	仕事以外のことで併設学校の同僚と話をするのがよくある。	中	7	12	5	2	27	46	19	8	2.92	73	27
		高	10	30	22	3	15	46	34	5	2.72	62	38
6	併設学校の学校行事や生活指導について、関心がある。	中	6	17	2	1	23	65	8	4	3.08	88	12
		高	17	35	10	3	26	54	15	5	3.02	80	20
7	併設学校の行事や生活指導について、疑問に思ったことを聞いたり、よいと思ったことを提案したりすることがある。	中	2	10	11	3	8	38	42	12	2.42	46	54
		高	7	28	24	6	11	43	37	9	2.55	54	46
8	担当授業以外で併設学校の生徒の教科指導に関わることがある。(補習、特別授業等)	中	1	6	5	14	4	23	19	54	1.77	27	73
		高	11	18	13	23	17	28	20	35	2.26	45	55
9	併設学校の生徒の生徒指導に関わることがある。	中	2	4	8	12	8	15	31	46	1.85	23	77
		高	9	16	19	21	14	25	29	32	2.20	38	62
10	生徒に関わることで、併設学校の教員に相談のこともらうことがある。	中	3	16	3	4	12	62	12	15	2.69	73	27
		高	12	25	20	8	18	38	31	12	2.63	57	43
11	自分の分掌の仕事を積極的にを行い、改善すべき点を見つけ、改善しよう働きかけることができる。	中	5	10	9	2	19	38	35	8	2.69	58	42
		高	17	33	11	4	26	51	17	6	2.97	77	23

5. 併設学校の同僚と関わりを持つきっかけになったものとして主なもの3つを選んで下さい。

		回答数	回答数/回答総数
1	教科が同じ	中 23	88%
		高 54	83%
2	分掌が同じ	中 12	46%
		高 36	55%
3	部活が同じ	中 13	50%
		高 28	43%
4	職員室の座席が近い	中 4	15%
		高 12	18%
5	同じ生徒を担当している	中 8	31%
		高 22	34%
6	同じプロジェクトに関わった	中 4	15%
		高 13	20%
7	研修会で同じグループになった	中 2	8%
		高 11	17%
8	自分が併設学校に在籍したことがある	中 2	8%
		高 6	9%
9	懇親会やレクリエーションで親しくなった	中 7	27%
		高 9	14%
その他:	中	特にきっかけはなく自然にそうなった。TTとして同じ授業に入っている。年齢が近い。	
	高	共通の知人がいる。役職立場が近い。中等部入試。授業を担当している。	

6. 併設学校の教育活動の様子をどのようにしてお知りになりますか。主なものを3つまで選択してください。

		回答数	回答数/回答総数
1	ホームページ	中 3	12%
		高 5	8%
2	生徒との会話	中 10	38%
		高 29	45%
3	会議や打合せ	中 22	85%
		高 54	83%
4	同僚との会話	中 20	77%
		高 58	89%
5	学年便り	中 0	0%
		高 7	11%
6	研修	中 10	38%
		高 16	25%
その他:	中	授業。	
	高	通りがかりに。年間行事予定表。個別に関心のあることを聞く。職員室での教員や生徒の会話。	

7. 以下の項目について、先生御自身の事実やお気持ちに最も近い選択肢をお選びください。

		回答			百分率			平均点	4と3の割合		2と1の割合		
		4	3	2	1	4	3		2	1			
1	一般の公立学校よりも学力差が大きく、授業に困難がある。	中	2	3	11	10	8	12	42	38	1.88	19	81
		高	28	18	14	5	43	28	22	8	3.06	71	29
2	併設学校の同僚の授業を見て、自分には異校種の授業はできないと思うところがある。	中	5	9	7	5	19	35	27	19	2.54	54	46
		高	7	19	26	13	11	29	40	20	2.31	40	60
3	学力が重視される点で、一般の公立学校よりも、プレッシャーを感じることもある。	中	2	9	9	6	8	35	35	23	2.27	42	58
		高	5	17	33	10	8	26	51	15	2.26	34	66
4	6年間を通した人間教育が重視される点で、一般の公立学校よりも、プレッシャーを感じることもある。	中	1	8	10	7	4	31	38	27	2.12	35	65
		高	5	16	35	9	8	25	54	14	2.26	32	68

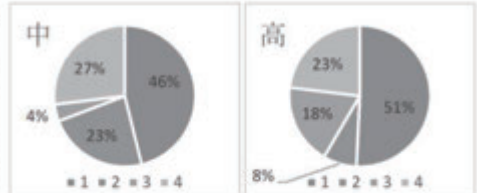


公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

5	教科書や教材の選定について、異校種の教員に相談することがある。	中	1	8	9	8	4	31	35	31	2.08	35	65
		高	6	16	26	17	9	25	40	26	2.17	34	66
6	授業内容や授業の進め方について、異校種籍の教員に相談にのってもらうことがある。	中	5	10	6	5	19	38	23	19	2.58	58	42
		高	10	22	24	9	15	34	37	14	2.51	49	51
7	併設学校の生徒と関わる際には、発達段階を意識しながら関わっている。	中	6	17	2	1	23	65	8	4	3.08	88	12
		高	18	39	7	1	28	60	11	2	3.14	88	12
8	中等部は高校入試がないため、ゆとりをもって授業が展開できる。	中	4	7	11	4	15	27	42	15	2.42	42	58
		高	6	41	14	4	9	63	22	6	2.75	72	28
9	高校は、中等部があるため、一般の高校よりも生徒指導が厳しいように感じられる。	中	0	3	14	9	0	12	54	35	1.77	12	88
		高	0	10	31	24	0	15	48	37	1.78	15	85
10	中等部は、高校があるため、一般の公立中学校よりも生活のきまりが守られにくいように感じられる。	中	6	11	5	4	23	42	19	15	2.73	65	35
		高	7	13	34	11	11	20	52	17	2.25	31	69

8. 授業以外で併設学校の生徒と会話することがどれくらいありますか

		回答数
1	日常的にある	中 12 高 33
2	週に1度程度ある	中 6 高 5
3	月に1度程度ある	中 1 高 12
4	ほとんどない	中 7 高 15



9. 異校種籍の同僚の授業や生徒指導に接し、よい影響を受けたと思われることがありますか。あれば、例についてか、具体的なものを3つまで選んでください。影響を受けたことがなければ、回答ができません。

		回答数	回答数/回答総数	中回答割合	高回答割合
1	授業の技法	中 9 高 45	43%	71%	78%
2	発達段階に応じた生徒対応	中 5 高 49	24%	平均2.1項目	平均2.3項目
3	教科内容についての知識	中 14 高 23	67%	21	70
4	保護者対応の技法	中 2 高 6	10%		
5	個に応じた生徒指導の技法	中 3 高 20	14%		
6	研修に対する姿勢	中 0 高 18	0%		
7	進路指導についての知識	中 12 高 3	57%		
	その他:	中 高	4%		

↑本項目の中高は採用時の籍

10.	以下の項目について、先生のお気持ちと最も近い選択肢をお選びください。	回答	百分率	平均点	4と3の割合	2と1の割合
	4 そう思う, 3 まあそう思う, 2 あまりそう思わない, 1 そう思わない	4 3 2 1	4 3 2 1			
1	中高の教育内容の重複を避けることで、効率のよい教科教育ができる。	中 4 13 8 1 高 6 27 29 3	15 50 31 4 9 42 45 5	2.77 2.55	65 35 51 49	
2	中学校の教科指導は必ずしも大学入試につながってもよい。	中 3 9 11 3 高 7 27 23 8	12 35 42 12 11 42 35 12	2.46 2.51	46 54 52 48	
3	高校の教員が中学生に関わることは中学生の学習意欲を高めることにつながる。	中 6 18 2 0 高 18 36 10 1	23 69 8 0 28 55 15 2	3.15 3.09	92 8 83 17	
4	中高それぞれで行われている生徒指導の内容は、全体で情報共有した方がよい。	中 14 10 1 1 高 31 31 3 0	54 38 4 4 48 48 5 0	3.42 3.43	92 8 95 5	
5	進路指導について、高校教員が積極的に中学生にも関わっていく必要がある。	中 5 16 4 1 高 15 34 15 1	19 62 15 4 23 52 23 2	2.96 2.97	81 19 75 25	
6	中等部は中学校籍の先生だけが担当することが望ましい。	中 2 3 12 9 高 3 10 30 22	8 12 46 35 5 15 46 34	1.92 1.91	19 81 20 80	
7	高校は高校籍の先生だけが担当することが望ましい。	中 4 7 10 5 高 3 16 27 19	15 27 38 19 5 25 42 29	2.38 2.05	42 58 29 71	
8	6年間を通して持ち上がって担当する教員が各学年にいるのが望ましい。	中 11 7 7 1 高 24 26 13 2	42 27 27 4 37 40 20 3	3.08 3.11	69 31 77 23	
9	中等部への人事交流は併設高等学校からの方が望ましい。	中 6 10 8 2 高 18 24 20 3	23 38 31 8 28 37 31 5	2.77 2.88	62 38 65 35	
10	中高一貫校においても、中学校と、高校では教育の目的が異なるので、無理に教育目標をそろえない方がよい。	中 4 10 6 6 高 6 23 23 13	15 38 23 23 9 35 35 20	2.46 2.34	54 46 45 55	

11. 先生ご自身が中高一貫校で大事にしたいとお考えのものを、2つまでお選びください。

	回答数	回答数/回答総数
1 高校入試の影響を受けず、ゆとりある安定した生活をおくれること。	中 4 高 6	15% 9%
2 継続した指導によって、生徒の個性を伸ばしたり、優れた才能を発見したりすること。	中 16 高 48	62% 74%
3 継続した指導によって効果的な教育を可能にし、大学進学の実績をより伸ばすこと。	中 7 高 33	27% 51%
4 異年齢集団の活動によって、社会性や豊かな人間性をより育成できること。	中 17 高 29	65% 45%
5 中等部で安定した人間関係づくりをすすめ、生徒の高校入学時の精神的負担を減らすこと。	中 3 高 11	12% 2%
その他:	中 高	

12. 中高一貫校の取り組みとして次のものはどれくらい効果的だと思いますか。

	回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
	4	3	2	1	4	3	2	1			
1 中高6年を見通したシラバス作り	中 10 高 19	12 36	3 8	1 2	38 29	46 55	12 12	4 3	3.19 3.11	85 85	15 15
2 一体となった校務分掌の活動	中 6 高 13	14 43	6 7	0 2	23 20	54 66	23 11	0 3	3.00 3.03	77 86	23 14
3 部活動における中高一体の運営	中 7 高 27	16 33	3 4	0 1	27 42	62 51	12 6	0 2	3.15 3.32	88 92	12 8
4 人事交流（中高間での人事異動を伴うもの）	中 7 高 19	14 36	4 8	1 2	27 29	54 55	15 12	4 3	3.04 3.11	81 85	19 15
5 授業交流（人事異動を伴わないもの、ITも含む）	中 6 高 28	17 28	2 7	1 2	23 43	65 43	8 11	4 3	3.08 3.26	88 86	12 14
6 生徒同士の異学年交流	中 15 高 30	10 33	0 2	1 0	58 46	38 51	0 3	4 0	3.50 3.43	96 97	4 3

13. 先生御自身は異動を伴う中高の人事交流のご経験がありますか。（中高一貫校内部での異動も含みます）

	回答数	回答数/回答総数
1 現在、交流中	中 7 高 2	27% 3%
2 交流の経験が過去にある	中 3 高 16	12% 25%
3 交流の経験はない	中 16 高 47	62% 72%

14. (人事交流経験者のみ) 次の項目について、交流中の先生御自身のお気持ちにどれくらいあてはまるか、最も近い選択肢をお選びください。

	回答				百分率				平均点	4と3の割合	2と1の割合
	4	3	2	1	4	3	2	1			
1 教科指導に不安と困難を感じる。	中 1 高 4	2 12	0 4	2 3	20 17	40 52	0 17	40 13	2.40 2.74	60 70	40 30
2 異校種の「やり方」に慣れるのに精一杯である。	中 1 高 7	2 7	1 7	1 8	20 30	40 30	20 35	20 4	2.60 2.87	60 61	40 39
3 生徒の発達段階に応じた指導に困難を感じる。	中 0 高 6	3 12	1 5	1 0	0 26	60 52	20 22	20 0	2.40 3.04	60 78	40 22
4 校務の分業（分掌など）の考え方が異なり、苦勞をしている。	中 0 高 4	3 10	1 9	1 0	0 17	60 43	20 39	20 0	2.40 2.78	60 61	40 39
5 周りの先生に迷惑をかけているのではないかと不安がある。	中 0 高 2	1 12	4 6	0 3	0 9	20 52	80 26	0 13	2.20 2.57	20 61	80 39
6 異校種籍の先生との授業観の違いに戸惑いを感じる。	中 1 高 7	1 9	2 7	1 0	20 30	20 39	40 30	20 0	2.40 3.00	40 70	60 30
7 授業について、これまでの教員経験を積極的に活かす工夫をしている。	中 1 高 10	3 10	0 10	1 2	20 43	60 43	0 9	20 4	2.80 3.26	80 87	20 13
8 同僚に対し、これまでの教員経験を積極的に活かした提案ができています。	中 0 高 6	3 9	1 6	1 2	0 26	60 39	20 26	20 9	2.40 2.83	60 65	40 35
9 同僚からの十分なサポートがされていると感じる。	中 1 高 9	3 12	0 1	1 1	0 39	60 52	20 4	20 4	2.80 3.26	80 91	20 9

↑本項目の中高は採用時の籍



## 公立併設型中高一貫校における教員の意識調査

## 15. よりよい中高一貫教育を行うため、中高の教員が一緒に取り組めることはどんなことだと思いますか。(任意回答)

授業づくり、ボイスチャーター/授業研修の推進/中学生対象に、高校生または高校の教員が現在の高校の姿・実績を説明して、高校に上がるとこんな風になれるんだ、なりたいな、と思わせる話をする。/それぞれの生活指導、進路指導などについて、情報交換する機会があればよいと思う。または、文書の共有があればよいと思う。/目指す生徒の姿を共有して、同じ目標にむかって取り組むこと/人事交流/教科指導に関する理解や共有/一貫生については6年間、継続した指導(生徒指導や進路指導)ができること。/研修テーマを統一した授業改善、指導法の工夫。/生徒支援会議による職員の共通理解による継続的な支援/部活動の連携・生徒会活動の連携/研修の充実、互いの授業の参観、6年間を見通したシラバス作り(教科、進路など)/

行事などでの異学年交流/一貫した生徒指導/授業改善に向けた研究/6年間育てたい生徒像の共有/部活動/研修によって相互理解を図ること。中高一貫教育の趣旨を理解しようとしていない先生は中高どちらにも在籍されている。/共同での教材研究/生徒の成長の変化を共有すること/合同の文化祭/授業研究/シラバスの作成。授業内容の検討。/学習環境改善(ハード面)を整備するため、管理職への働きかけ/進路実現のためのプロジェクト。/学校行事/生徒の6年間の成長(性格や人間関係の把握)をおうこと/学校改革/生徒指導や進路指導における視点が義務教育と高校で大きく異なる。このため、行事(文化祭・コーラスコンクール・体育祭)等では意図的に中高一体で行うことを基本としつつ運営中心が高校側の行事・中学側の行事のように仕分けておくことで、制度上は別の学校(併設型)であっても同一校として中高の教員と一緒に取り組めると設立当初は考えられていた。(現状では、行事ですら中高分離実施へ移行している。)/一貫した生徒指導/生徒が高校を卒業する時のビジョンを共有し、それに必要な学力や人間性を身につけるための指導とは何かをしっかりと考え実践していくこと。/研修で話し合いを持つこと。しかし、研修を多くすることではない。/進路指導シラバスの作成/部活動の指導。英語と数学の授業におけるTT/教科の教育内容について継続性を重視して情報交換をすること。/共有できる研修テーマを設定して研修を行い、授業参観等を通して助言を行う。/同じ研修会を持つ/6年間を見通したカリキュラムマネジメントの研修/中から高への系統的な教科指導について、中高の教師がきちんと話し合うこと。発達段階に応じた指導を、それぞれが行って情報共有をすること。/中高共通の行事等/学校行事の協同開催。高校生から中等部生への学習支援/授業の相互乗り入れ/生徒の情報共有/高校教員による中等部生への特殊講義などの実施(実施中)/

## 16. 中高一貫校で自身を取り組んでみたいことはどんなことですか。(任意回答)

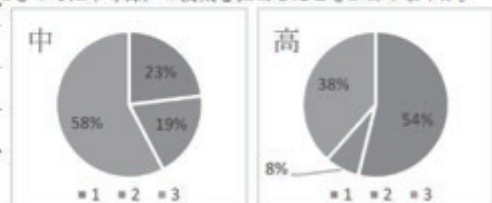
6年間の見直しを立てて6年間教科指導をする。/中学での指導の経験をできるだけ高校の現場に伝えていければよいと思う。/6年間を見通した授業づくりや行事づくり/高校生が中学生に勉強を教える機会を増やすこと。/TTによる授業/高校教諭との共同授業、部活動の6年一貫指導/授業力強化をめざした職員研修/たがいの授業を参観しあう/

中高混合の部活動指導/特別活動を通じた魅力ある学校づくりへの取り組み/6年間を通じた生徒の個人研究。/新しい学力観に基づいた授業研修/6年間の学習指導・進路指導シラバスの明示。/中高一体の部活動運営/英語の指導を6年間行っていきたい/中高交流授業/高校生が中学生に教える補習/試験結果等に関する情報共有。入学時から卒業までの追跡調査。/高校生と中等部生によるグループ学習/学習指導の今以上の充実、道徳の充実。/高校生による中学生の指導/成績面での伸び方と指導法の研究/コーラスコンクールが中高分離開催になってしまったものを元のように中高合同開催に戻してみたい。/徹底した初期指導/上記と同じ内容/交流(異動)/6年間の授業シラバスづくり/異年齢の交流/学年による発達段階や、それによる生徒への接し方をもっと知った上で授業改善を図りたい。/併設校の授業見学や担当教員との会話/6年間を見通して教科指導を段階的に進め、「わからない」と思う生徒をなるべく少なくなるようにすること。/中高学習交流を一層進め、総合学習の中に、高校生がリーダーとなってテーマごとに中学生を指導していくプロジェクトを取り入れること。/既に授業を乗り入れており、取り組んでいる。/管理職でなければ困難だが、中等部门教員の増加、授業時間・生徒指導の負担軽減を推進したい。/

## 17～20は教職員の属性項目のため省略

## 21. 併設学校(中等部所属する先生にとっては高校、高校に所属する先生にとっては中等部)の授業を担当したことがありますか。

	回答数	
1 単独で担当していた(している)	中	6
	高	35
2 単独で担当したことはないが、TT(チームティーチング)で担当していた(している)	中	5
	高	5
3 担当したことはない	中	15
	高	25



## 22～24は教職員の属性項目のため省略